Buddha Sakyamuni

# 進化

SHINKA
Published by
Religious Organization ALEPH

Vol.34 2003.10

【新連載】 パーリ経典から学ぶ「布施」……わたしのもの鳥輪廻転生談
【言葉のお守り箱】 「波羅蜜」
【新連載】 クンダリニー・ヨーガ成就者の修行体験談

大乗の発願

ホー
湖面に映る虚像のような
様々な幻影に引きずられ
輪廻の大海を浮沈する生き物たち
彼らすべてが
絶対自由・絶対幸福なる
マハーヤーナにて
安住することができるよう
四無量心込めて
大乗の発願をいたします

SHINKA 2003.10 October VOL.34

# 進化

CONTENTS

◆法則を語る

無常・苦・非我
——悟りに至るいくつかのヒント
ヴァジラチッタ・ヴァンギーサ正悟師
……4

◆連載

●［新］パーリ経典から学ぶ「布施」……34
第一回　わたしのもの鳥輪廻転生談
（マイハカ・ジャータカ）

●言葉のお守り箱　……48
第二回　「波羅蜜」
ヴァジラチッタ・ヴァンギーサ正悟師

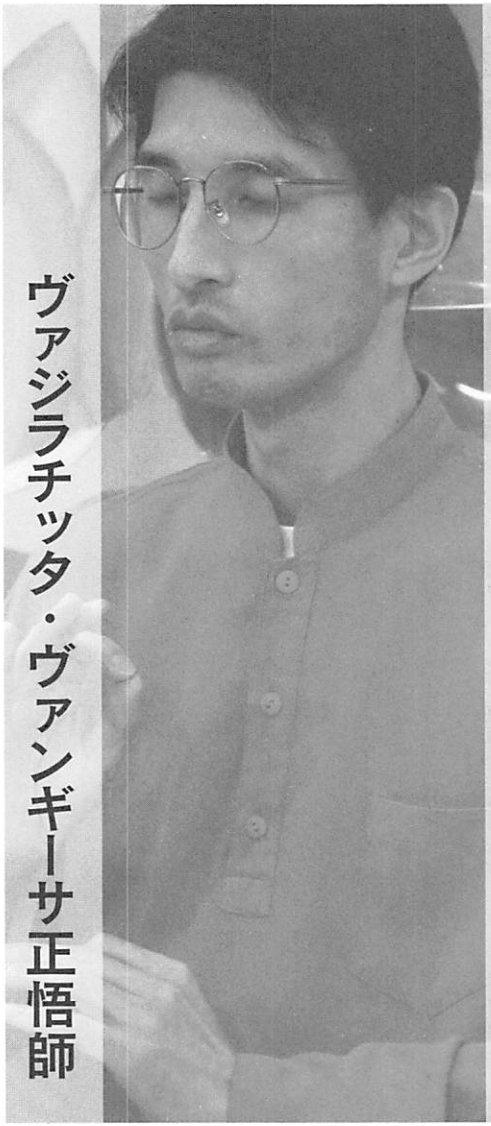
●聖者列伝 …… 56
第二話　すべての人々から愛される大聖者
ミラレーパの物語（2）
●聖なる遺産 …… 74
最終回　西洋にも見られる霊的シンボル
●深遠なる占術の世界 …… 76
第五回　月の神秘的な力
●アーレフの道場に行ってみよう！ …… 92
謙太郎さんの道場訪問記
第四回：長野道場編
●わたしの修行実践記 …… 102
右足切断のピンチを修行で乗り越えた！
●クンダリニー・ヨーガ成就者の
修行体験談 …… 104
◆聖者の言葉 …… 108
◆アーレフ伝言板 …… 110
・指名手配者に関する情報提供の呼びかけ
・アーレフ信者に対する慈善活動の呼びかけ
・サリン被害者の無料検診に対する支援呼びかけ
◆アーレフご案内 …… 114
・宗教団体アーレフ紹介
・道場案内
・ホームページ案内
・「進化」バックナンバーのお知らせ
◆編集後記 …… 120

# 法則を語る

Dharma Talk

## 無常・苦・非我
## ——悟りに至るいくつかのヒント

（二〇〇三年八月十四日　光音天三和にて）



ヴァジラチッタ・ヴァンギーサ正悟師

## ◆多く知識を入れることは非常に危険を有する

今日はまずね、説法を読むことから始めたいと思います。

これは『サマナ用教学システム』ですけども、わたしの非常に好きな説法の中で、「詳説・変容のヨーガ」という説法があります。これは九三年八月二十五日の説法ですね。そして、この変容のヨーガの説法に関しては、この変容のヨーガのところもいいんだけども、わたしが特に好きなのは後半部分で、この「最も忌むべき対象――知識を多く取り入れること」というところです。

若干読んでみます。

> 多く知識を入れることは非常に危険を有する。なぜならば、「知識」というものは相対的な世界の情報にすぎず、それだけではなく、相対（あいたい）する知識というものが、教えの中にも多く存在しているからである。したがって、自分の得た知識の一つをまず経験的に確定させること、これに没頭すると。

それからちょっと飛びましてね……。

サキャ神賢もそうだし、それからカギュー派のグルたちもそうだが、多くのことを決して実践しない。例えば経典でも、四念処という単純な瞑想法がまず説かれる。

なぜ四念処という単純な瞑想が説かれるのかというと、この単純な瞑想を行なうことによって、まず現世捨断が生じるからである。現世捨断が生じることによって何が起きるのかというと、そこで光が現われる。これは実際に、視覚的に光が生じるのである。光が生じることによって、確信を持つと。

そして、この光というのはいろんな光があるわけだが、それは次の段階の、大乗の修行に移行した段階で、その光の意味合い、および光の使い方が伝授されると。そして、光の意味合い、光の使い方が伝授された次の段階において、最終的には光の源の世界へ至る道が伝授されると。そして、このすべてを理解した段階で、この世の中は、苦しみではなく、楽しみの集積であることが理解できるようになると。つまりこれが、サムサーラがニルヴァー

ナに変容された状態である。

しかし、もし初めから多くのものを、例えば「サムサーラとはこうである」とか、「ニルヴァーナとはこうである」とかいう知識を徹底的に叩き込んでしまうとどうなるかというと、観念的世界を構築してしまい、そのために逆に光が現われないと。つまり、四念処の効果がなくなると。

## ◆宗教的な知識の危険性

特にちょっと長く引用しましたけども、ここの部分はわたしはすごく好きなんですね。

ここで、今読んだとこでおわかりのとおり、この説法における「知識」というのは、これは現世的な知識はもちろんだけれども、この「宗教的な知識も駄目だ」と言っている部分にポイントがあります。

早合点する人はね、「え、『宗教的な知識は駄目だ』といったら、わたしたちのやってる教学とか記憶修習、瞑想の記憶修習はどうなるんだ」という話があるかもしれないけ

ど、これはちゃんと説法読めばわかるんだけど、それは早合点ね。

というのは、この説法では、「まず現世捨断が生じるからである」、ね、「現世捨断が生じることによって何が起きるのかというと、そこで光が現われる」とあるよね。現世捨断が生じるための教え、実践、これはいいわけだよね。だから、皆さんがなさっている瞑想、修行というのは、現世捨断を生じさせるためのものでしょ？だからこれはOKということになる。

だけどもそうではなくて、――まあ現世的な知識っていうのは、もちろんです。これは、もう思いっきりね、光が消えるというのが現世的知識ですから、これは非常に危険を有すると。

それから、宗教においてもどういうものが問題かというと、ここに書かれているとおり、「サムサーラとはこうである」「ニルヴァーナとはこうである」と。こういうものを学問的に知識として取り入れると、こうすると体験が消えるという事実があります。

だから、例えばやってはいけないのは、「空とは何だ」と、それを定義付けたりね、それについて、光も見えないのに「空とは何だ、何だ」って考えすぎると。これをやることは、わたしはマイナスではないかと考えます。

それと、これはサマナは非常に好きなところだけども、占星学ね。これは非常に観念的なね、世界を構築しやすいと。それであの、血液型もそうだけど――そうすると「自分もやってるじゃないか」という批判が来るけどね。これは実際の話、例えば占星学だと、「九月から火星が何々に入って、それでどうのこうの」と、「わたしは悪くなるんです」というところで、観念的世界を構築して否定的になると。これでは意味がないわけだよね。

『進化』32号の最後のほうに占星術の話があって、そこに袁了凡（えんりょうはん）というね、中国の明の時代の人の話があります。その袁了凡という人は、要するに、占いが非常に当たる先生に付いて、それでそのとおりに人生が進んでいくということで、淡々とやってたわけだけども、でもあとでね、自分は運命を打ち破ることが大事なんだということに気が付いて、その「カルマを打ち破る」、布施功徳の実践、戒律の実践をなしたということです。

それはそのとおりで、占星学は占星学として、自分のカルマを知る上においてはいいかもしれないけども、それを固定させてはいけないと。観念的世界を構築してはいけないということね。

だから、そこで観念的世界を構築しないで、「それは一つのカルマであると。だからわたしはこのカルマを乗り越えるようにしよう」と考えるんだったらOKだけども、「いやあ、わたしは九月から調子が悪いんです」「十月から調子が悪いんです」とかね、そういうことは言ってもしょうがない。だからここは注意しなくてはいけません。

このように、ここの「知識を多く取り入れること」、これは非常に危険であると――ここの示唆というのは非常に大きい、とわたしは考えます。

## ◆単純な瞑想の効果の高さ

今回の皆さんの修行は、比較的単純な修行が多いかもしれない。まあ立位礼拝というのはね、ある意味単純だけども、例えば、今回時間的に多くとられているのは、喜・軽安覚支、これが多くとられているよね。それから決意、十一月特別決意だったかな、それも導入されていると。決意とかこの喜・軽安覚支っていうのは、ある意味単純なところがあると。

しかし、わたしの経験から行くと、九〇年のわたしの長期修行、成就修行のときは

――まあ成就できなかったけども、このときは――この決意、喜・軽安覚支、それから性欲を滅する瞑想、これだったんだよね、瞑想は。それでずーっとこの瞑想を繰り返して、どの体験をしたかというと、形状界の体験をしてます。それでしっかりと生起過程のサマディにも入れたし、究竟過程のサマディにも入れたし、そこまでの体験ができるんです。

だから、ここでも、この説法でもあるとおり、単純な瞑想が説かれると。単純な瞑想というのは大事なんです。それは現世捨断を生じさせる単純な瞑想ね。

だから皆さんが今このセミナーで行なっていらっしゃる決意、それから喜・軽安覚支、これをしっかりとなすならば、非常に効果があるんだということを、確信を持って行なってください。

それで、ここで書かれているとおり四念処とか、まあわたしは最近、ちょっと思い付いてるのは、無常・苦・非我なんだけどね、テーラヴァーダの――まあ今日は、その無常・苦・非我の話にあとのほうはなるわけだけども――無常・苦・非我、これは非常に単純な瞑想です。

しかし、この単純な瞑想法こそね、非常に大事だと。それはなぜならば、わたしたち

に光がもたらされるからであると、体験がもたらされるからである、ということが言える。

だから今回のセミナーのメニューっていうのは、わたしは非常に意義深いと感じています。特にわたしは、喜・軽安覚支のね、その効果というのを自分でも長期修行によって体験してるからである、ということです。決意の、例えば「修行するぞ」と、これだけでも効果があるわけだけどね。

## ◆大きな声を出すことの意味合い

その喜・軽安覚支や決意に関して言うならば、わたしたちは、しっかりと原則を踏まえましょうと。原則とは何かというと、大きな声を出すということですね。これは立位礼拝もそうだけども、大きな声を出すと。これをしっかりと実践しなくてはいけないと思います。

まず、その大きな声を出すことのメリットは何かと言ったならば、まず一つは、それによって肯定的になるということ。これはわかりますよね。

もし小さな声でぼにょぼにょぼにょぼにょとやってたら、顔もだんだん下向きになって、「ああ、つらいなあ」とかいう話になってくると。否定的になってくる。詞章をあまり声を出さずに唱えていると、やっぱり眠気が生じたり、否定的な思いが生じたりします。

しかし、大きな声を出して、無理やりにでも大きな声を出して、とにかく「この声がグルに届け！」という感じで、大きな声を出していると、だんだん肯定的になるものです。それが第一。

第二に、潜在意識にデータを入れる、ということがあります。

それは、ボーっとした状態というのがあるけれども、ボーっとした状態で小さな声で唱えるということはどうなるかといったら、それは潜在意識の煩悩とか自分のデータに押し流されていることを意味します。だから、そこに真理のデータは入っていかないんだね。よって、詞章を大きな声で唱えるということは、潜在意識に深くデータを入れるということになると。

第三に、大きな声を出すことによって、口のカルマが浄化されるということがあります。これは、喉をつぶすくらいやる必要がある。わたしも二回喉をつぶしているけど、

それによってカルマが落ち、声は通るようになります。

それと第四はエネルギーです。エネルギーを高めるためには声を出す必要があると、しっかりと。

これは実際ね、声が通る通らないっていうのは非常に大きくて、それによって、本当にエネルギーの上昇、それから明るさ、そうしたものが全然違ってきますから、だからできるだけ、自分のできる範囲で構わないですから、できるだけ大きな声を出して唱えると。

## ◆喜覚支の素晴らしさ

それと、特に喜・軽安覚支に関してそうだけども、あれは初めね、「うれしいなあ」とか言っても全然うれしくないと。だけどもそれを、とにかく頑張って「うれしいなあ、うれしいなあ」って言い続けていると、本当にね、その喜び、喜覚支の喜のエネルギー、これが込み上げてくるわけです。

この喜の状態というのは、あれはすごい明るさ、エネルギーなんですね。エネルギーがめっちゃくちゃ強い状態、めっちゃくちゃ明るい状態、これが喜なんです。このとき

必ず光が見える。これが喜なんだね。

その喜の状態に達するには、とにかくものすごい明るさが必要なんです。だから心においてめちゃくちゃ明るくなければいけない。そしてものすごくエネルギーが上がらなければいけない。これが喜の状態ね。

喜覚支というのは、まさにこの喜の状態に入るわけだから、第二静慮の状態に入らなければいけないわけだから、だから当然、その喜・軽安覚支を行なうとき、できる限り大きな声を出して行なうと。そして、うれしくなくても「うれしいなあ」と。楽しくなくても「楽しいなあ」と言うと。そうすると不思議なもので、実際その効果が現われるということになるわけです。

だから、まさにこの喜・軽安覚支という修行は、この説法にもあるとおり、単純な瞑想によって光がもたらされる、この瞑想であると。決意もそうである、ということになる。

よって、こういう単純な瞑想法というのはね、非常に、重視してほしいと思います。

## ◆ワークにおいては変容が必要

じゃあここで、ここにいらっしゃる方はほとんど財施とか外と接している方だから、こういう話が出るかもしれない。「いや、わたしは、ワークにおいて知識が必要なんです。知識を取り入れなきゃいけないんです」と。それから、「どうしても考えなきゃいけないんですよ」と。「だからそんなに、『知識を取り入れることは危険を有する。現世的な知識駄目だ』と、頭から言われても困ります」と。

じゃあこれはどうなのかと、この意見に関してはね。

これは何かおかしいと、わたしは思うんだね。というのは、あなた方がやっているその知識というのは、それはワークなんじゃないですかと、わたしは思うわけです。ワークだとしたならば、そのワークというのは、そもそもグルへの奉仕活動ですよね。グルへの奉仕活動ということは、そこで実践しているのは何かといったら、グルの意思を実践しているということになるわけです。

だから、……ろくでもない知識を入れたらこれは駄目だよ。ワークと関係のない知識、それはもう駄目だけども、例えばプログラムのためにプログラムの知識を取り入れ

るとか、例えばパソコンの販促のためにいろんな知識を取り入れるだとか、それはワークの一環ですよね。ワークの一環だということは、それはグルの意思の実践なわけだから、それはどうして悪いことがあるのかと。

だから、そのときわたしたちは、「わたしがこの知識を入れること、それからわたしがこういうプログラムとか何かで考えること、そういうことは、これはグルの意思である。グルに対するお供物である」と考えて、変容する必要があると。

そしてグルに捧げますと。この知識をグルに捧げますと。わたしのこの能力をグルに捧げます、という気持ちを持ってなすならば、それは、必ずやグルからの恩恵というものがあるはずである。それはなぜならば、グルの意思にかなっているからであると。

そして、すべての体験はグルからもたらされる、という原則を考えなければいけない。つまり、そのワークをしっかりと集中してなすならば、それはグルの意思にかない、グルからの恩恵があると、グルから体験がもたらされるということになる。

だからね、決して、ここの場合の知識というのは、マイナスではないよね。

## ◆無思考の状態に至るために

その、結局のところね、グルからすべてはもたらされるとは何かといったら、それは考えないということです。

例えば、こういうことは皆さん経験したことがあるんじゃないかと思います。一つのワークに集中すると。わたしの場合だったらね、例えば文章を書くとか校正をやるとかそういう形になるかもしれないけども、集中すると。集中し続けると。集中したとき一切雑念がわかないと。そのときは、思考してない状態というのが形成される。

この無思考の状態、この無思考の状態とは何かといったならば、これはグルの意思に集中している状態ということができる。

だからこれは無智じゃないんだね。無智というのはボーっとして何も考えられないと。ところが、無思考でそういうワークに集中しているときというのは、当然そこのところでワークに集中できているわけだから、グルの意思に集中しているっていうことです。全然違うよね。考えられないっていう、全く無智で何にもできないっていう状態ではないわけだから。

だからその無思考の状態、この状態に集中して至ること、ワークでね、それは素晴らしいことであると考えられます。

それで、例えば瞑想においても、深い瞑想というのは何かっていったら、無思考の状態が出てくる。当然そうだよね。

初め、有熟考有吟味と。熟考と吟味のある状態が来て、それから無熟考有吟味という状態があって、それから最後は無熟考無吟味と来るわけでしょ。熟考と吟味がなくなって無思考の状態が来ると。これは何かっていったら、それは第二静慮であると。それで第二静慮、このあたりから生じてくるのは光であると。それで光がどんどん深まってくると、そこから生じてくる思念というのは何かっていったら、これは四無量心の思念だね。それから第三静慮に至るということになる。

だから深い瞑想に入ったとき、そこから生じてくるのは四無量心なんです。じゃあこの四無量心とは何かっていったら、それはグルの意思だよね。つまり、グルの意思にどんどんどんどん集中していくこと、これが無思考の状態であるということが言えます。

だから皆さんの場合、ワークに集中することによって、この無思考の状態を得ることもできるだろうと。そして今はね、修行をやっているわけだから、修行に集中すると。

できるだけ大きな声を出して修行に集中すると。それによってこの無思考の状態、深い瞑想状態に入っていただきたいな、とわたしは考えます。

## ◆無常・苦・非我――テーラヴァーダ仏教の難しさ

はい、じゃあ次の話。途中でも言いましたけど、無常・苦・非我という話に入りましょう。

南伝仏教、このテーラヴァーダ仏教というのは、非常にある意味難しい。なぜならば、詳細が説かれてないからであると。

例えば、先程言った有熟考有吟味という話があると。有熟考有吟味にして云々（うんぬん）と出てくると。じゃあ熟考と吟味ってどうやればいいのって――書かれてないんです。だからある意味、テーラヴァーダ仏教は一番難しい。やっぱり実際そうなんだね。

例えば、証智・捨断・現証・修習と簡単にあるわけだけど、証智、自分の煩悩を証智しなさい、それを捨断しなさい――なかなか難しいよね、これね。

だから、この無常・苦・非我っていうのは、まさにこれは非常に難しい。というのは、

詳細が書かれてないからであると。

すべてのものは無常であると。無常なるがゆえにそれは苦なり。苦なるがゆえに我が本体にあらず。我が本質にあらず。それは非我であると。ああそうか。無常・苦・非我、無常・苦・非我。これ「無常・苦・非我、無常・苦・非我」って唱えても、何だかわかんないと。

だけど実際、サキャ神賢の息子でもあり、高弟であったラーフラ、ラーフラはこの無常・苦・非我によって悟ってます。だから、この無常・苦・非我の瞑想っていうのは、非常に効果があるはずなのであると。今日はその話をしたいと思います。

## ◆苦しみ——修行から見た素晴らしさ

まず考えてみましょう。無常なるがゆえに苦しみが生じる。これは皆さんわかりますよね。じゃあその苦しみとは何かと。

苦しみというのは何かといった場合、それは四苦八苦とかね、三苦とかね、皆さんいろんな教学でいろいろと出てくるでしょう。だけど苦しみというのは次のように考える

ことができます。

まず、苦しみというのは、これはわたしたちのカルマ落としであると。わたしたちのカルマの浄化のためにあるのである、と考えることができる。それから、苦しみというのは何かと言ったならば、わたしたちに悟りとか気付きを与えてくださるものだ、と考えることができる。

例えば、死、病、老いとかいう苦しみがあるわけだけども、それによってわたしたちは真理の大切さに気付かされ、そして真理の実践ができるようになると、まあそういう例だよね。

それからまた、この苦しみとは何かといったら、わたしたちはその苦しい環境ね、厳しい状況に追い込まれて、それでいろんな様々な証智ができると。自分の内側の証智ができると。

やっぱり、それは厳しい環境にないとね、なかなか自分の本質っていうのは現われないよね。自分のカルマというのは現われないよね。そうすると証智もできないと。しかし「きついなあ」という状況にあってこそ、心が動き、そしてそこの心の本質、自分と煩悩の本質、カルマの本質が現われると。だから証智ができると。当然証智ができたな

らば、そこのね、「あ、わたしの中にはこういうカルマがあったんだ。こういう煩悩があったんだ」ということでね、それを捨断する方向に向かうだろうと。当然修行は進むわけである。

だからこれを考えるならば、苦しみというのはカルマの浄化であり、「あ、そうか」と。それから気付き、悟りを与えてくださるものであり、「あ、そうか」と、ね。それで証智して修行が進むものである、「あ、そうか」と。「あ、苦しみというものも悪いものではないな」と考えることができるわけです。

## ◆非我——すべては心の現われ

じゃあ次。無常であって苦しみであると、苦しみも悪いものではないと、わたしはしっかりと修行に役立てよう、という考えをもって見たならば、そこのところの苦しみ、苦しみであるがゆえに、そこにわたしたちの実体は存在しないということになる。その苦しみの中において、わたしたちの実体は存在しないとなる。なぜなら、わたしたちの実体とは苦しみではないからである。

そして、これは何かといったならば、すべてのカルマにおいて、そこのところにわたしたちの本質はないと。だから何かといったら、それはすべての現象というのはわたしたちの本体ではないということになる。それで、すべての現象というのは夢のようなものであるということになる。

こういうことを考えてくると、例えば、幻身のヨーガの修行、夢のヨーガの修行っていうのはこれになるんだね。つまり、周りの現象、これをすべて幻影であると見ると。夢であると見ると。だから、この無常・苦・非我の教えっていうのは、「あ、何だ。これ、幻身のヨーガの修行とか、夢のヨーガの修行も出てくるんだ」ということに気付くわけです。

じゃあ、すべての現象が幻影であると、わたしの本体ではないということはどういうことかと。

すべての現象は何かといったならば、それは外側のもので、外側のものは実体がなく幻影なんだから、結局のところ、それは心がつくり出したものにすぎないということになってくる。つまりここから、すべては心の現われであるというのが出てくるでしょ。だからすべては心の現われなるがゆえに、そういう「実体がない」という現象が生じる

わけである、ということになる。

つまり、ここで大乗仏教で非常に重要な教え、唯識（ゆいしき）で特に説かれる教え、「すべては心の現われ」という教えが出てくるわけです。この「すべては心の現われ」、これがわたしたちが悟りに至る大きなポイントとなってくるわけですね。ここでは、すべての現象は自己のカルマである、すべての現象には実体がないと見られるかどうかというのがポイントとなります。

だから、この無常・苦・非我の教えでね、ラーフラが悟ったと、それは当然だろうと、わたしは考えます。それはまさに真理の本質のところを実践なさったから、それは当然ラーフラは悟ったんだろうと、わたしは思います。

## ◆変容――すべてはグルの祝福

ではここでね、変容することを考えてみましょう。

その、すべては心の現われという話がありましたけれども、じゃあそのへんはどう考えたらいいかと。すべての現象というのは、わたしたちのカルマによって生じていると

考えることができる。それはわかりますよね。カルマによってすべては現われるわけだから。

ではそのカルマというのは何があるかといったならば、カルマというのは苦しみと楽があると。まあ楽でも苦しみでもないものがあるけれども、それはちょっとここでは置いておきます。というのは、それは動かないっていうことになるから、置いておきますけども。

では苦しみとは何かといったら、先程も言ったとおり、「これはわたしのカルマの浄化である」と考えることができると。それから当然、気付き・悟りを与えるものであると考えることができる。では何かと。これはグルの祝福であると考えることができると。

では楽とは何かといったならば、これは徳の消耗であると考えることができる。だから、楽の状態、楽しみの状態、喜びの状態が生じたなら、「あ、わたしはここで徳を消耗しているんだ」と考え、そして「そこに巻き込まれないようにするぞ」と、「心を動かさないようにするぞ」と。心を動かさないことが、ここにおいてのグルの祝福であると考える必要があります。

では結局何かといったならば、すべてはグルの祝福であるということになります。だから楽も苦もすべてはグルの祝福であると。そうしたならば、すべてのカルマはグルの祝福であると考えることになる。そして、すべての外側の現象はグルの祝福であると考えることになる。つまり、要するにすべてはグルの祝福なわけです。

そして、この「すべてはグルの祝福」ととらえること、これが全肯定的思考であるわけです。それによって、わたしたちはこの現象の世界というのを自在に変えていくことができる、ということになる。

ただね、ここで注意しなくてはいけないのは、これはまずいというのは、「わたしには性欲があると。性欲があって破戒をしそうであると。これはグルの祝福である」といって、性欲に走ると。その性欲にはまってしまうと。食欲が出ると。「外に出て、これは煩悩の影響を受けたからしょうがないんだと。だから買い食いの一回や二回はしょうがない」といって、買い食いをして肯定をすると。それで、その買い食いにはまってしまう。これは正しいだろうかというと、これは煩悩肯定をしているだけだから、正しいとは言えない。

ただ、こういうのはあり得るよ。例えば「わたしは性欲がある」と。例えば性欲の破

戒をしてしまったと。性欲の破戒をしてしまって、その結果地獄や動物に堕ちたと。「地獄や動物に堕ちたから苦しいんだ。苦しんだ。これはグルの祝福である。つまり、わたしの中に性欲があって三悪趣に堕ちた。三悪趣に堕ちて苦しみを体験しろと、そういうふうにグルはおっしゃって三悪趣に堕としたのであると。グルはありがたい。祝福である」と。こう考えることはいいと思います。ただ、これつらいけどね。

つまり、こういうのはいいけれども、ただ煩悩肯定にね、グルの祝福を使ったらまずいよと。

だから煩悩肯定で使うときは、その過患、味著だけじゃなくて過患を考え、それが三悪趣に堕ちる道であると考えて、「ああ、わたしは三悪趣を体験したいのかな。体験したいんだったら体験すればいい」と、ここまでいったら偉いと思うけどね。そして、「苦しみを味わおう」と。苦しみを味わって、「ああ、この苦しみ。ああ、わたしはああいう破戒をなしたから、こう苦しんでいるんだ。これはグルの祝福である」と、こう考えたらすごいよね、その修行者はね。でもこの考え方はＯＫですよ。まあなかなか、心が強くないと駄目だと思うけれど。

## ◆無明なるがゆえに慚愧の念

まあ、何を言いたいかというと、この無常・苦・非我の教えっていうのは、結局のところ「すべては心の現われである」という、この悟りの大きなポイントを示しているものであると。そして、これになると密教的になるけれども――、でもおそらくラーフラだから、ラーフラの実践したことだから、ラーフラの場合はサキャ神賢真理勝者はもう絶対でしょ。父親でもあったわけだしね。だから、その絶対の存在に対しての帰依っていうのはすごかったと思います。

だから当然、すべては心の現われであるといったときに、「ああ、それはグルの祝福であると。すべてはグルの祝福である」ととらえることも当然できたと思う。だから当然、そういう偉大なる悟りに至ったのではないかと、わたしは考えます。

よって、こういう形で、無常・苦・非我――特に苦しみ、この苦しみをしっかりと見つめ、そして苦しみというのは祝福であると、そして喜びとすると、それは非常に大きなことであると考えます。

しかしね、ここに慢があると、なかなかそう見えないんですね。

わたしたちはそこで慢を持たずに、わたしは無明であると。なぜ無明かと言ったならば、わたしはまだここの現実の世界を現実の世界ととらえているからであると。この現実の世界、それを自分の心の現われとしてとらえられていないからであると。そう思って、「ああ、わたしはまだ無明である」と、「無智である」と考えるならば、その苦しみというのも肯定できるはずであると。苦しみというのもグルの祝福であると考えることができる。

ところが、そこで慢が出てしまうと、苦しみというのは嫌だとかね、苦しみというのはそんなの関係ない、とかいう話が出てくる。

だからここでは謙虚さね、本当に慚愧の念、特に自分が無明であること、これに対するしっかりとした認識が必要ではないかと考えます。

だって、無明じゃなかったら、要するに非二元なわけですよ、一言で言ってね。無明っていうのは非神秘力でしょ。十二縁起の最初に来るわけでしょ。自と他の区別でしょ。

もしこの無明がなかったら——無明じゃないっていう人がここにいるんだったら、それはほんとに素晴らしいけれども——、この世の中っていうのは存在してないよね。自

と他の区別がない世界に入ってるわけだよね。だから、もちろん、この現象世界にいて、現象世界も見えているけれども、アストラルも見え、コーザルも見え、マハー・ニルヴァーナも見え、というような、そういう状態になってるわけでしょ。

もちろんわたしはなっていません。だから無明である。皆さんもそうだと思います。無明であると。だから、もう無明であることは事実なんだね。だから、堂々と「わたしは無明である」と。「だから修行するのである」と言っていればいいわけです。

そして、この無常・苦・非我の教え、そして「すべては心の現われである」という大きなポイント、これをしっかりととらえ、そして、「すべてはグルの祝福である」と考えて、肯定的に頑張っていってほしいと思います。

## ◆つまずいたらやり直せばいい

それからね、最後にデフラグの話をしたいと思います。

デフラグというのは、わたしは非常に好きでして。デフラグというのは、コンピューターを使っているとファイルがぐちゃぐちゃぐちゃってなったりするので、そのファイ

ルを整理するために、一つの作業が必要となる。それがデフラグという作業、でいいのかな?——デフラグという作業なわけです。

それで、デフラグというのは、しょっちゅうやっていればそんなに問題ないんだけど、例えばね、二週間に一遍とか一カ月に一遍やると、非常に引っかかる。時間がかかる。それで、コンピューターが、カチャカチャカチャカチャカチャって一生懸命やってて、例えば二四パーセント、あ、引っかかったっていって、ゼロに戻る。それで、ダダダダって、今度は二六パーセントまで行きました、また引っかかりました、ゼロに戻る。これを延々とやってるんですね。

それで、あのデフラグっていうのは、非常に偉いと思いますね。どんなにつまずいてもめげない。最初っからやり直す。それで、またつまずいてもやり直す。そして、ね、当然それは「初めからプログラムされてるから当たり前だ」って言えば当たり前なんですけど、まあわたしはそのデフラグから学んでいるわけですね。

「どんなにつまずいても、初めからやり直せばいいじゃないか」と。

それは、この前ヴァジラティクシュナー正悟師がおっしゃってたけども、つまずいたらやり直せばいいじゃないかと。そのとおりだと思います。

そして、何度も何度もつまずいて、壁にぶちあたる。そして頑張ると。そうしたならば、最終的には達成されると。そのデフラグも、最終的には完全な整理が付くわけだね。データの整理が付くわけです。

だから、皆さんもね、こういう形で決してあきらめずに、自分の煩悩をぶち破ること、乗り越えることは大変ですけれども、決してあきらめずに、修行、ワークに励んでいってほしいと思います。

新連載

# ❖ パーリ経典から学ぶ「布施」

## 第一回　わたしのもの鳥輪廻転生談（マイハカジャータカ）

この連載では、パーリ経典から「布施」に関する部分を紹介することにしたい。

第一回は「わたしのもの烏輪廻転生談」である。ここには重要な法則が説かれている。つまり、布施をするときには喜んで行なうことが大切だ、という教えだ。布施をする前に喜び、布施をしながら喜び、布施をした後に喜ぶ。だが、布施をした後に後悔したならば、その布施の功徳は実らなくなってしまう。わたしたちは、この布施についての喜覚支を修習すべきなのである。

## 財産を使うことのできない裕福な商人の死

コーサラ国の首都サーヴァッティ。「すべてのものがある」という意味の名を持つこの都市に、一人の裕福な商人がいた。この商人は豊かで、大いなる財産を持っていた。しかし、困ったことに、その財産を自ら楽しむことができないまま、亡くなってしまったのである。

最高の味付けのされた極妙な食べ物を差し出されても、それを食べようとはせず、まずくて酸っぱい粥や、屑米の粥だけを食べる。ファッションの中心地カーシ国産の香りのよい衣服が差し出されても、それを受け取らず

に持ち帰らせ、毛玉の付いたようなボロボロの外衣を着る。血統のよい馬が引き、水晶や金で飾り立てられた二輪馬車をどうぞと差し出されても、それを持ち帰らせて、木の葉の日傘付きの古い小さな二輪馬車にしか乗らない。

それでは、この商人は余った財産を他の人に施すのか、といえば、決してそんなことはなかった。自ら財産を楽しむこともなく、かといって施しもせず、布施の功徳など一度も積むことがないまま一生を終え、そして号叫激苦地獄に転生してしまったのである。

この商人には息子がいなかった。相続人がいない遺産は、すべて国家のものとなるのが決まりである。早速、国王の軍隊がやってきて王宮に全財産を運び込んだが、その作業が

終わるまでには実に七昼夜もかかってしまった。

こうして財産が王宮に納められたとき、国王は朝食を済ませてから、ジェータ林に行き、サキャ神賢のもとへと赴いたのである。

「大王よ、どういうわけで覚者に奉仕をしなかったのか」

とサキャ神賢はおっしゃられた。七日間、覚者サキャ神賢のところへやって来なかった理由を尋ねられたのだ。

「実はサーヴァッティで、ある裕福な商人がなくなりました。その遺産は相続人がいないため、国庫に引き取ることになったのですが、その膨大な財産を宮殿に運ぶのに七日もかかってしまったのです。

ところで、この商人は、こんなにたくさんの財産を持っていながら、自分のために使うこともなく、かといって他人に施すこともありませんでした。彼の財産は、守護神によってふさがれた蓮池のように、取り出すことができなかったのです。そして、おいしい食べ物を口に入れて味わうこともなく、逆に死という口に呑み込まれてしまいました。

このように、物惜しみをして徳のない生命体は、一体何を行なったがために、こんなにたくさんの財産を手に入れたのでしょうか。そして、何のために、自分の財産を使うことができなかったのでしょうか」

「大王よ、財産を得るという果報と、得た財産を使うことができないという報いは、次のようなことからなされたのである」

サキャ神賢は大王の懇願によって、過去の

生の物語をお話しになった。

## 完全な布施ができなかった過去世の話

――その昔、バーラーナシー（剣の城壁）という都に、ブラフマダッタ（神聖賦与）という王が君臨していたころのことである。バーラーナシーに一人の裕福な商人が住んでいた。この商人は、法則に対する信がなく、物惜しみをし、だれに対しても何も施さず、何の恩恵も施そうとはしなかった。

その日、商人は国王への奉仕に向かう途中だった。そこに一人の人物の姿が見えた。托鉢によって施し物を得ようとして歩いているのは、タガラシキン（香りのよい房）という名の独覚だ。商人は、独覚にうやうやしく挨拶をした。

「尊者よ、施し物の食事は得られましたか？」

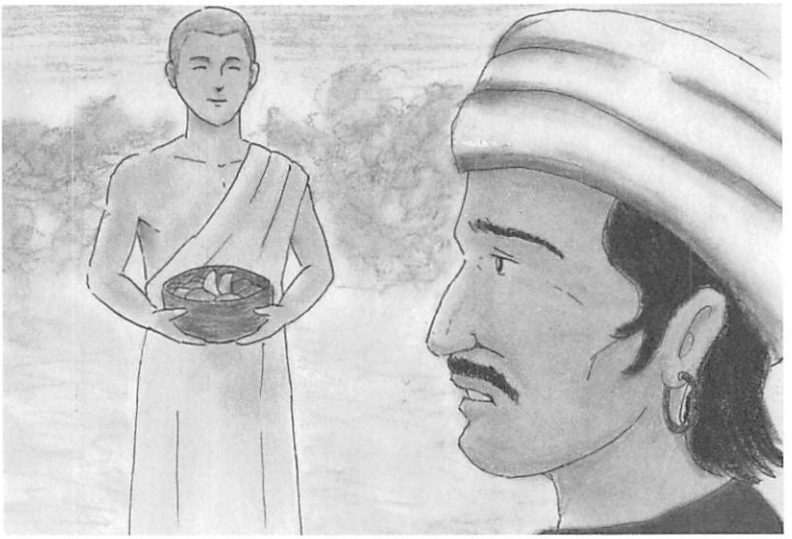
「いや、裕福な大商人よ、見てのとおりわたしはまだ歩き回っているところだ」

商人はそこで珍しく下男に命じた。

「では、わたしが王宮に行っている間に、このお方をもてなしなさい。わたしの長椅子に座っていただき、それから、わたしたちのために作られた食事を、この方の鉢に満たして施しをするよう、妻に告げなさい」

下男は言われたとおり、独覚を連れて家に帰っていった。

さて、裕福な商人は下男や独覚と別れて王宮に向かう。そこで用事を終えての帰り道、もう一度独覚と顔を合わせた。商人は深々と



挨拶をした。

「尊者よ、食事は得られましたか」

「ええ、いただきました」

商人が見ると、確かに鉢の中には極上の食べ物が入っていた。下男から話を聞いた商人の妻は、言われたとおり、最上の味の様々な食事を独覚の鉢に満たして施したのだ。

だが、それを見た商人は、急に心が落ち着かなくなった。

「これは、わたしの食事である。これを自分の奴隷や召使いたちが食べたならば、相当の仕事をさせることができただろうに。ああ、もったいない。これは本当に、わたしにとっては損失だ」

商人は、布施をなしたことを後悔した。

ところで、布施を行なう場合には、三つの

思念を揃えていた場合に大いなる果報をもたらすのだが、この商人は三つの思念を完全なものにできなかった。その三つとは何だろうか。

まさに布施の前に喜びを生じよう。

同様にたとえ施しながらでも、大喜びを生じよう。

同一にたとえ施してからでも、後から悔やんではならない。

この理由ゆえに、このようにわたしたちの若さは衰えない。

まさに布施の前に喜んで、

施しながら心を穏やかにすることができ、

布施をしてから大喜びが生じる。

これが捧げることの達成である。

布施の前に喜び、布施をするときには心を穏やかにし、布施をした後には大きな喜びが生じる。このとき初めて、布施は完全なものとなる。

裕福な商人は、独覚タガラシキンに施したがゆえに、今生、多くの財産を手に入れることができた。しかし、施した後、布施をしてから喜ぶという思念ができなかったために、せっかく手に入れた財産を自ら楽しむことができなくなってしまったのである。——

## 少年の不審な死
## ――「わたしのもの鳥」の教え

この話を聞いて、国王はもう一つの質問をした。

「では、この裕福な商人に息子がいなかったのはなぜでしょうか」

「大王よ、商人が息子をもうけられないという報いを受けたのは、次のような理由があるからだ」

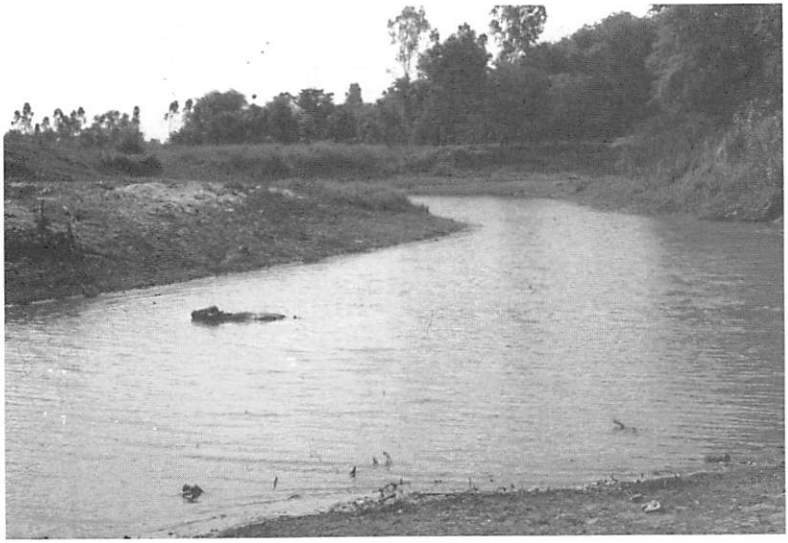
サキャ神賢は、もう一つの過去生の物語をお話しになった。

――その昔、バーラーナシーの都にブラフマダッタが君臨していたころのことである。

ある裕福な家で、一人の子供が行方不明になるという事件が起こった。この少年の行方がわからなくなったのは、川で水遊びをしていたときのことだという。母親は少年の身を案じ、泣き叫び続けている。

この行方不明になった少年の家庭状況は少々複雑である。少年の父親は、少年が歩くようになったころ、出家してしまっていた。この愛欲の世界における過患（かかん）、そしてそこから解放されることの功徳を実感するようになった――というのが出家の動機である。そして、禁欲生活を続けるうちに様々な証智をなし、様々な生起のサマディを生じさせ、雪山に移り住んでいる。

父親の出家後、少年は母親とともに叔父、つまり父親の弟のところに身を寄せていた。



つまり、少年の父親は、全財産と妻子を弟に預けて出家したということになる。

もともと、少年の祖父は八億の私有財産を持つ裕福な商人だった。その祖父が亡くなって、長男（つまり少年の父親）が弟（つまり少年の叔父）を引き取って、全財産と屋敷を管理してきた。少年が生まれ、成長して出家するまで、その家の前には布施堂が作られ、偉大な布施が続けられていた。

その膨大な資産を受け継いだのが、少年の叔父である。そして、最近はその叔父自身にも息子が生まれ、賑やかになった矢先の事件であった。

この事件が起こってからしばらくして、少年の父親が突然、雪山からバーラーナシーに

帰ってきた。正装を整えて、門の前に立つ。

「兄が帰ってきた」と聞いて、弟はすぐさま出迎えた。

「さあ、講堂にきて食事を食べてください」

久々の再会に、弟は兄を素晴らしい食事でもてなした。その食事の後、口を切ったのは兄の方だった。

「ところで、わたしの息子の姿が見当たらないようだが、一体、どこにいるのだ?」

「尊者よ、亡くなってしまいました」

「どういうわけで?」

「水遊びの場所で亡くなってしまったんですが、どういう理由か、わかっていないのです」

少年の父親である出家修行者は、弟に対して鋭く指摘した。

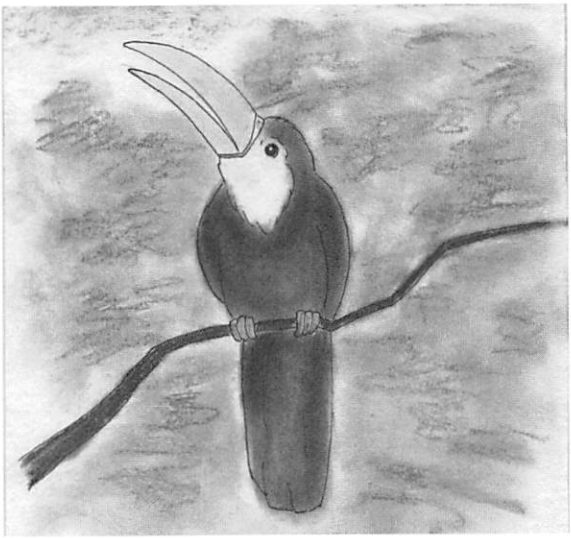
「この悪党め。どうしてわからないなどと言えるのだ? お前がやったことはすべてお見通しだ。殺したのはお前ではないか」

弟は青ざめる。

「お前には息子が生まれた。そして、その子供の将来を考えるようになった。お前の子供が成長しても、わたしの息子がいる限り、財産は半分しかもらえない。そこで、わたしの息子を殺し、財産をすべて自分の子供に受け継がせようとたくらんだ。そして、川遊びの最中に、川に落として殺したのだ。そうだろう?」

弟は返答に窮した。すべてそのとおりだったからだ。

兄である出家修行者は、この家に帰ってきたときに、弟が貪りを強めたためのもう一つの結果を目の当たりにしていた。自分が出家



する前にはあったはずの布施堂がなくなっていたのだ。出家するとき、弟には「怠ることなく布施を行ないなさい」と言い残しておいた。それなのに、弟は布施堂を壊し、布施をしなくなってしまっていたのである。

それでも出家修行者は感情を荒立てることはなかった。覚者の上品さをもって法則を説き明かしたのである。

「いいか、お前が国王などの権力によって滅ぼされたとしたら、財産を守ることなどできやしないだろう？『わたしのもの鳥』の話を聞いたことがあるか？　その鳥とお前はまるで同じではないだろうか？

『わたしのもの鳥』という名前の鳥は、山岳の尾根にある洞窟に住む鳥である。

熟したインドボダイジュの実に上り、
『わたしのもの、わたしのもの』と鳴く。

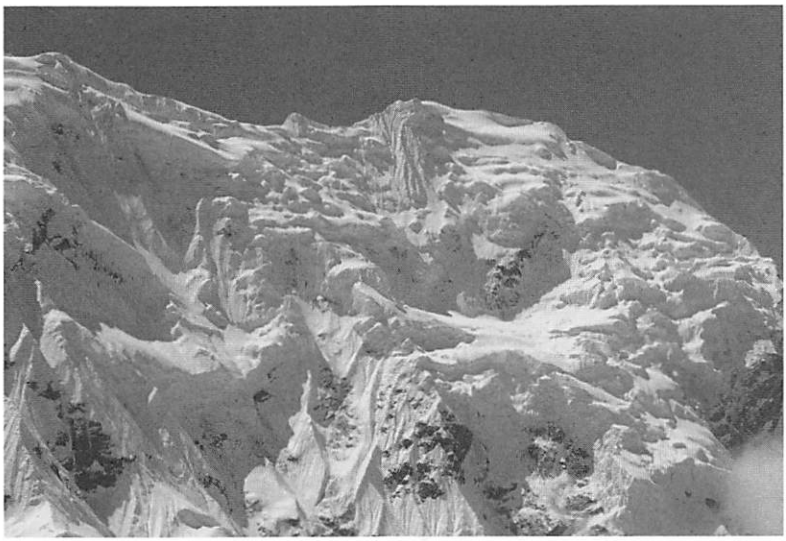
まさに彼が無益に話すと、
大勢の鳥たちが一緒に集まって、
インドボダイジュの実を食べていく。
しかしながら、その鳥は無益に話した。

まさにこのように、ここである者は、
数多くの財産を集め、
自分自身に対しても、親族たちに対しても、
最大限従事することがない。

彼は衣類、食事、
花飾り、化粧品を、
一度も経験せず、
親族たちに何も恩恵を施さない。

まさに彼が、
『わたしのもの、わたしのもの』と、
無益に話して守っても、
まさに国王たち、あるいは無法者たち、
相続人たちは、敵意があり、
財産を持って去る。
しかしながら、そのひとかどの人は無益に話した。

揺るぎない者は種々の富を習得し、
そして、親族たちに恩恵を施す。
それによって、彼は評判に達し、
そして死後、天で楽しむのである。



いくら『わたしのもの鳥』が自分のものだと主張しても、他の鳥に木の実を奪われてしまうように、お前がいくら財産を独り占めしようとしても、それは失われてしまう。布施をして、死後は天界に至れるようにしなさい」

兄である出家修行者は、このように弟に法則を説き示し、以前のように布施をさせるようにした。雪山に戻った出家修行者は、その後、静慮を完全なものとして、神聖世界に達したのである。これこそ、サキャ神賢真理勝者の過去世の姿であった。そして、その弟が裕福な商人である。過去の生において兄の息子を殺したがゆえに、裕福な商人は、これほどの長い間にわたって息子も娘も得られなかったのである。

（第一回　終）

# 言葉のお守り箱

## 第二回「波羅蜜」

ヴァジラチッタ・ヴァンギーサ正悟師

paramita

まずは、「波羅蜜（パーラミター）」という言葉を探っていきたい。

この「パーラミター（pāramitā）」の原義は、「（なにがしかの徳目を）何が何でも守り通すこと」である。この原義に、わたしたちは「徹底」という言葉を対応させた。

パーリ語においては、「パーラミー（pārami）」という言葉が多く見受けられる。この「パーラミー」には「徹底」という意味がある。そして、「パーラミー（pārami）」に、状態を表わす接尾辞「tā」が付いた言葉が「パーラミター（pāramitā）」であって、これをわたしたちは「徹底の状態」と訳している。

つまり、「徹底の状態」という訳語は、「波羅蜜（パーラミター）」の原義から訳されたものであると言える。

しかし、この「波羅蜜」にはもう一つの訳語がある。それが「到彼岸」である。

「パーラミター（pāramitā）」という言葉を、「pāram+ita」と分解した場合、そこからは「彼岸に（pāram）至った（ita）」という意味が現出する。そこから出てきたのが「到彼岸」という漢訳だが、この訳語は「パーラミター」の原義からは離れているように思われる。

果たして、どちらが正しいのか？

だがここで、わたしたちは、一つの言葉に多くの意味合いが込められることを忘れてはなるまい。

一つの言葉に多くの意味合いが込められるというのは、枕詞や掛詞の伝統があり、同音異義語の多い日本語においては、容易に理解できることと思う。わかりやすい例としては、昔の電

報の間違いというのが挙げられよう。

「寝台車頼む」のつもりで打った「シンダイシャタノム」が、「死んだ。医者頼む」と読まれてしまったというのがそれだ。また、「金送れ頼む」のつもりで打った「カネオクレタノム」が、「金をくれた飲む」に読み間違えられたという話もある。

もちろん、こうした例は日本だけにとどまらない。古今東西珍しくないことだが、それについて、二、三の例を挙げてみよう。

中国の明の太祖・朱元璋（※注1）の「文字の獄（※注2）」も、やはり同音異義語の問題から生じた。

朱元璋は、張士誠の「士誠」という官名は文人が付けたもので、その出典は『孟子』にあり、その名には「士誠、小人なり」という裏の意味があることを知る（※注3）。そこで、文人の文章をチェックし、「則」を「賊」とし、「帝扉」を「帝非」とし、それを書いた文人を罰することになるのだが、これも同音異義語によって別の意味が付されることを考えると、詮無いことと言わざるを得ない。

フランス語でもこうしたことは見受けられる。フランス語では、ある単語に別の言葉が埋め込まれたりしていて、時にはマジックのような意味合いが現出する。

ノストラダムスの造語「アンゴルモア（Angolmois）」の中に、「神の御使いモーセ（Ange+ol+Moise）」という意味が埋め込まれているのは、この例であろう（ノストラダムス研究家のデイヴィッド・オーヴァソンは、これを「天使オルの月（Ange+Ol+Mois）」と解釈している）。

シュールレアリズム時代の作家であるレーモン・ルーセルにおいては、同音異義語の追究がそのまま作品となる。

「古い玉突き台のクッションに書かれたチョークの文字（Les lettres du blanc sur les bandes du vieux billard.）」という文言にある最後の「billard」を「billard」と一文字変えるだけで、それが「老いた盗賊の一味について書かれた白人の手紙」と意味を変えてしまうことに、ルーセルは気付く。そこから書かれたのが、『アフリカの印象』という作品である。

閑話休題（それはさておき）。

このような言葉の特徴を考えると、「波羅蜜」は「徹底の状態」という意味なのか、「到彼岸」という意味なのかといった、二者択一の議論は愚かであるように思える。ここは、二者択一で

（※注1）明の太祖・朱元璋：中国の明王朝を建国した初代皇帝（一三二八～九八）。

（※注2）文字の獄：中国の諸王朝では、「文章中に使われた文字が王朝・皇帝に対する批判を込めている」という理由で、数々の弾圧が行なわれた。これを総称して文字の獄という。例えば清王朝の雍正帝（ようせいてい）の時代、官僚試験問題に「維民所止」とあったが、「維」「止」は「雍正」の頭をはねたものである、として出題者の一族を処刑した。文字の獄には、このように文字の形によるもの、同音異義語によるものなど様々な形式がある。

（※注3）張士誠：旧名は張九四。元王朝の末期に反乱を起こしたが、朱元璋に敗れた人物。生前は文人を重用した。張が一時期王となったとき、文人は「士誠」と名付けたが、これは『孟子』という書物に「士は、誠に小人なり」とあるのをもじって「士誠、小人なり」という意味が込められていた。実はバカにされていたわけである。

はなく、双方を認めてもいいのではないかと思えてくるのである。そう考えると、「徹底の状態」という原義に、「到彼岸」という意味が付与されるというのは、むしろ言葉に重みが加わるようで素晴らしく思えてくるから不思議である。

実際、耳で聞いたときのことを考えてみよう。確かに、原義は「徹底の状態」だとしても、「パーラム・イタ」と聞こえたとき、「パーラミター」は「彼岸に至った（到彼岸）」という言葉に変貌してしまう。

つまり、「パーラミター」においては、「徹底の状態」という訳語も、「到彼岸」という訳語も、どちらも成立するということである。

こうした問題で、漢訳において有名なものに、「観自在菩薩」と「観音菩薩（観世音菩薩）」があ

この二つの原語は、「アヴァローキテーシュヴァラ（avalokiteśvara）」というサンスクリット語である。この原語を「観（avalokita）＋自在（īśvara）」とするのが原義に近いわけだが、「観（avalokita）＋音（svara）」とすると「観音」となり、「観（avalokita）＋世（loka）＋音（svara）」とすると（ちょっとウルトラC的だが）「観世音」となるというわけである。

アヴァローキテーシュヴァラ

ここで、「シュヴァ（śva）」と「スヴァ（sva）」は発音が違うと思われるかもしれないが、この二つの発音は混同されていたという事実がある。そして、古い時代には、原語が「アヴァローキタスヴァラ（avalokitasvara）」であったという説もある。

結局のところ、これも両者とも否定できるものではなく、特に耳で聞いた場合は、どちらも成立するということになる。

ちなみに、「観自在菩薩」というのは玄奘三蔵の訳であって、「観音菩薩（観世音菩薩）」というのはクマーラジーヴァ（※注4）の訳である。

一つの言葉に複数の意味がある例として、「ターラー（tārā）」についても触れておこう。あのターラー女神の「ターラー」である。

この「ターラー」には、彼岸に渡す、救済者、瞳、星、輝き……といった意味があるが、ターラー女神の場合、彼岸に渡す、救済者、といった意味合いでとらえられる。そこで、わたしたちは、ターラー女神を「彼岸に至らせる救済者」と訳しているが、短く訳すならば「済度女神」といったところだろう（中国には「救度仏母」という言い方がある）。

そもそも「済度」という言葉には、「迷いの大海から救って、彼岸へ渡すこと」という意味

（※注4）クマーラジーヴァ：漢訳名で鳩摩羅什または羅什という。三四四～四一三。中国南北朝時代の訳経僧。インド人を父とし、亀茲国王の妹を母として西域に生まれ、七歳で出家。四〇一年長安に至り、「法華経」「阿弥陀経」「中論」など大規模な経典翻訳を行なった。羅什による漢訳経典を「旧訳」といい、玄奘三蔵の漢訳を「新訳」という。

があり、この「ターラー」の訳語としてはぴったりである。逆に、「ターラー」の訳語として「済度」という言葉が生み出されたのかもしれない。

また、「ターラー」にある「瞳」という意味は、ターラー女神の持つ七つの瞳を表わしているようで興味深い。

ターラー女神

言葉に別の意味が付与されることによって、瞑想体系が展開していく例もある。「サンヴァラ（saṃvara）」がそれである。

「サンヴァラ（saṃvara）」という言葉は、本来「禁戒」を意味する。ところが、インド東部では、サとシャの発音が混同されていたので、これが「最高の楽」を意味する「シャンバラ（śambara）」と通じるようになり、ついに母タントラ系の最高真理を示す術語になったと推定される。

チベット語で、「サンヴァラ」が「禁戒（sdom-pa）」あるいは「勝楽（bde-mchog）」と訳されるのは、このためである（わたしたちは「bde-mchog」を「上楽」と訳している）。

最後に、「真理勝者（タターガタ）」について触れてみたい。

この「タターガタ（tathāgata）」を「tatham+gata」とすると、「勝利を得て真理に到達した者」または「真理によって勝利した者」という

意味が出てくる。そこで、わたしたちは「真理勝者」と訳している。

しかし、「タターガタ（tathāgata）」を「tathā+āgata」とすると、「そのように来る」という意味になり、ここから「如来」という訳語が出てくるのである。チベット語ではこの解釈を用い、「タターガタ」を「そのようにお越しになる者（de-bzhin-gshegs-pa）」と訳している。これはどういうことであろうか。

真理勝者は、三界を超えて存在していらっしゃり、三界に自在に生じ、自在に滅することができ、一切の現象を思うままに動かすことができるという。よって、経典には、「真理勝者は、未来にも過去にも現在にも、存在しているとも言えるし、存在していないとも言える」という一節がある。

このような真理勝者の状態というのは、「そのように来る」というニュアンスにつながらないだろうか。「如来」というのは、真理勝者の深遠な特徴を言い表わしているように思えてならない。

ちなみに、チベット語では「世尊（bhagavant, bhagavat）」のことを「（煩悩の）制圧を有して煩悩破壊を達成した者（bcom-ldan-'das）」と訳する。このあたりは、翻訳の綾というか、翻訳の深淵をのぞき込んだ思いがする。

参考文献：
【佛教語大辞典】中村元著　東京書籍
【インド哲学七つの難問】宮元啓一著　講談社選書メチエ
【チベット密教】田中公明著　春秋社
【超巨人・明の太祖 朱元璋】堺屋太一著　講談社文庫
【ノストラダムス大全】デイヴィッド・オーヴァソン著
阿部秀典訳　飛鳥新社

# 聖者列伝

## 第二話 ◆ ミラレーパ

## 「すべての人々から愛される大聖者」ミラレーパの物語（2）

མི་ལ་རས་པ

**人生の浮沈、怨敵への復讐、そして真理を求めて……**

### ■マルパとの出会い

ミラレーパがトゥォルン（樺の木の谷）に着く前の晩、マルパとマルパの妻は象徴的な夢を見ました。運命付けられた弟子がやってくることを知ったマルパは、人夫の身なりをして畑に行き、ミラレーパが来るのを待ちました。

ミラレーパは、通りの傍らで、目の大きな、畏敬の念を覚えさせる顔つきをした背の高い太った僧が、畑を耕しているのを見ました。その人の姿が目に入るやいなや、言い表わしようのない喜びと、思いもよらぬ至福感に満たされ、この光景にしばし呆然として、身動きすらできませんでした。ミラレーパはその僧に

声をかけました。

「尊師である輝けるナーローパの直々の弟子、学識の深い翻訳者マルパが、この地方に住んでいらっしゃると聞きました。その方の家はどこでしょうか。」

マルパは、ミラレーパの頭のてっぺんから爪先まで、長いこと眺めて言いました。

「おまえはだれだ。」

「わたしは大罪人です。上ツァンから来ました。マルパは非常に名高い方なので、その教えを請いに参りました。」

「よろしい。マルパと会えるように手配してあげよう。それまでの間、畑を耕していなさい。」

マルパは、ミラレーパにビールを渡し、立ち去りました。

ミラレーパはビールを飲み干し、熱心に働き、手つかずだった部分も耕しました。

仕事を終えた後、迎えに来た子供に連れられて、マルパの家に行きました。そこでは、さっきの人夫が食事をしていました。

「この人はさっきと同じ僧だ。ラマはどこにいるのだろう。」

マルパは言いました。

「お前がわたしを知らないというのは本当だな。わたしがマルパだ。礼拝しなさい。」

ミラレーパは、マルパの足元に礼拝して言いました。

「ラマ・リンポチェよ、わたしはニマ・ラトゥー出身の大罪人です。この身・口・意を捧げます。食べ物と服と教えを与えてください。どうぞ、この一生で解脱に至る方法をお教えください。」

「お前が大罪人だなどという戯言は聞きたくない。罪を犯すよう仕向けた覚えはない。どんな罪を犯したのだ?」

ミラレーパは、罪を犯したいきさつをこと細かに告白しました。マルパは言いました。

「そうか、それを皆、お前がやったのだな。ともかく、身・口・意を捧げるのはよいことだ。だがわたしは、教え・食べ物・服のすべては与えないぞ。食べ物と服を得るなら、教えは別の者に頼まねばならない。教えを得るなら、食べ物と服は他で探さなければならない。この二つのうちのどちらかを選びなさい。しかし、教えを選んだからといって、今生で解脱に到達できるかどうかは、ひとえにお前自身の努力にかかってこよう。」

「それでは、教えを求めてあなたのところに参りましたので、食べ物と服はどこか他を探しましょう。」

ミラレーパが、持ってきた本を祭壇の部屋に置いておいたために、マルパは言いました。

「そのけしからん本をどけなさい。聖なる物と祭壇がけがれてしまう。」

「本の中に黒魔術が含まれていたから、こんなふうにおっしゃったんだ」

ミラレーパは、注意深くその本を片付けました。そして、ミラレーパは、さらに数日、マルパのもとにとどまりました。

こうして、ミラレーパは、師・マルパとの出会いを果たし、マルパに仕えることになったのです。

マルパ

## ■試練のはじまり

ミラレーパは、物乞いして集めた大麦と交換に、マルパに布施するための料理鍋を買い、ラマの住まいに戻りました。

疲労で震えたミラレーパが重い荷物を落とすと、部屋が揺れました。マルパは食事を取っていましたが、びっくりして食べるのをやめ、言いました。

「小男よ、お前はエネルギーがあり余っている。お前の魔術でわたしたちも家の残骸の下に埋めるつもりなのか。嫌なやつだ。大麦をどこかへ持っていけ。」

ミラレーパは、「このラマは怒りっぽい。自分の行動とラマへの奉仕の仕方には気を付け

なければならない」とつぶやき、空っぽの料理鍋をマルパに布施しました。

マルパはそれを手に取り、涙をこぼしながら「お前の贈り物は縁起が良い。これを偉大な師であるナーローパに布施しよう」と言い、布施するためにそれを高く掲げました。そして、音を評価するためにその容れ物の取っ手を振って鳴らし、祭壇のある部屋へ持っていきました。そして、祭壇のランプから取った溶けたバターで鍋を満たしました。

その瞬間、ミラレーパは大きな感動に打たれ、信仰に対する欲求が燃え上がりました。そして、マルパに教えを請いました。

マルパは言いました。

「ウーとツァンから忠実な弟子たちが多くわたしのもとにやってきている。ヤルドク・タクルンの住人と、リンの住人が、彼らを襲って食糧や布施の品を盗んでいる。この二つの地域を雹で埋めるのだ。これは宗教的な仕事だ。その後で教えを与えよう。」

ミラレーパは、指示どおり、二つの地域に雹の嵐を送り込んで、再びマルパに教えを請いました。すると、マルパは言いました。

「お前が送り込んだわずかの雹の嵐と交換に、あれほど苦労してインドから持って帰った教えを与えるべきだろうか。お前はわたしの教えを欲しがっている……。ロタク峠の山岳民たちは、ニェルロロから来るわたしの弟子たちを襲う。彼らはわたしのことを笑う。お前は自称魔術師なのだから、この登山者たちに魔法をかけなさい。お前の魔術が本物なら、一生と一つの身体で解脱を達成するナーロー

パの技法を、教えよう。」

言われたとおりにミラレーパが魔術をかけると、山岳民たちはお互いに戦い、多くが剣によって滅びました。

それを見たマルパは「お前は偉大な魔術師だ」と言い、その時からマルパはミラレーパを〝偉大な魔術師〟と呼ぶようになりました。

ミラレーパが三たび解脱についての教えを請うと、マルパは言いました。

「フン、わたしが命を懸けてインドに行ったのは、お前の多くの罪に報いるためだと言うのか。お前は、ダーキニーたちの生きた息であるこの教え、わたしが財産に糸目をつけず、計り知れないほどの黄金をつぎ込んだ、この教えを望んでいる。ただの冗談だといいがな！他の者だったら、お前を殺しているだろう。ではヤルドクの地の収穫を元に戻し、山岳民たちを治すのだ。その後で教えてやろう。しかし、それができなければ、絶対に戻ってくるな。」

このように、マルパはミラレーパを厳しく叱り、教えを与えようとはしませんでした。ミラレーパは悲しみに打ちひしがれて、泣いたのです。

## ■塔造りの試練

翌日、マルパはミラレーパのところに行き、言いました。

「昨晩、お前にとても厳しくしたが、落ち込ん

ではいけない。我慢するのだ。教えるということは、とても時間のかかることだ。お前には十分なエネルギーがあるから、わたしの息子、タルマドデ（スートラの若者）に与える塔を造れ。お前がそれを造ったら、教えを垂れ、そして、食べ物と服を与えよう。」

ミラレーパが、「その間に、信仰を持たずに死んだら、わたしはどうなるのでしょう」と聞き返すと、マルパは言いました。

「その間は死なないと保証しよう。わたしの教えは数語で表現できる。その教えに従って、辛抱強く瞑想することができれば、今生で解脱を達成できるかできないか、お前自身が示すことになる。わたしの系統では、他の系統にはない解脱のエネルギーが移入されるのだ。」

この慰めの言葉を聞いて、ミラレーパは喜

びで満たされ、「その塔の設計について教えてください」と言いました。

マルパの父方のいとこたちは皆、いかなる防御施設も建てないという誓いをなしていましたが、マルパはその誓いをしていませんでした。いまや、マルパは、塔を建てるというアイデアによって、親戚を欺く方法と、ミラレーパの悪業を落とす方法を同時に見つけたのです。

マルパから「山の東の頂きに、このような塔を建てなさい」と言われたミラレーパは、丸い塔を建て始めました。しかし、半分建て終えたときにマルパがやってきて、

「先日は、十分に考えていなかった。この塔を壊して、土と石を元の場所に戻しなさい」

と言いました。

言われたとおりに元に戻すと、今度は山の西の頂きで、マルパは酔ったふりをして、「これと同じ塔を造りなさい」と言いました。

そこでミラレーパは半円形の塔を造り始めました。それが半分できるかできないかというときに、再びマルパがやってきて言いました。

「これも正しくない。壊して、土と石を持ってきた場所に戻しなさい」

次に、北の山頂に行ったとき、マルパはミラレーパに、

「偉大な魔術師よ、先日わたしは酔っていて、きちんとした指示を与えなかった。ここに頑丈な塔を建てなさい」

と言いました。

ミラレーパが、

「建てている最中でそれを壊すと、惨めな気持ちになりますし、財産の無駄遣いです。どうか前もってよく考えてください」

とマルパに言うと、マルパは、

「今日、わたしは酔っていない。これについては、とてもよく考えた。この塔は、タントラの修行者の塔と呼ばれるだろう。これは三角でなければならない。この塔を建てなさい。塔が壊されることはない」

と答えました。

ミラレーパが三角の塔を三分の一ほど建て終わったときに、マルパがやってきて言いました。

「偉大な魔術師よ、だれのためにこの塔を建てているんだ。だれが指示を与えたのか。」

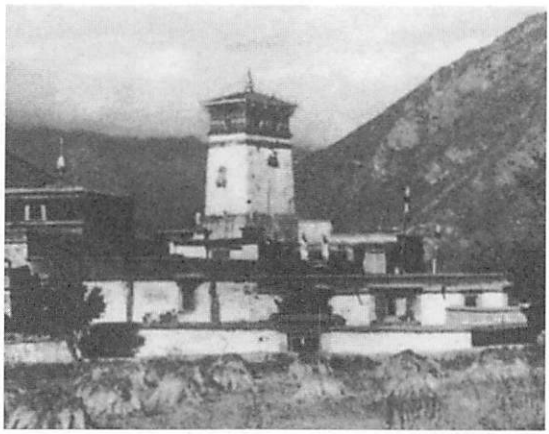
「ラマご自身が、息子さんのためにこの塔を建てるように命令しました。」

「そのような命令をした覚えはない。お前が正しいとしたら、わたしは気が違っているに違いない。完全に正気をなくしたのかな。」

「こうなるのではないかと恐れて、敬意を込めて、これについては注意深く考えてくださるように頼んだことを、わたしはハッキリと覚えています。ラマは、十分に考えたことであって、この塔が壊されることはないとおっしゃいました。」

マルパは怒り、

「よかろう、では、だれがその証人なのだ。おそらくお前は、魔術の三角形の中に閉じ込めるように、わたしたちを三角の塔に閉じ込めて、魔術をかけようとしていたのだろう。わたしたちはお前から遺産を奪ってはいない。お



ミラレーパが建てたといわれている塔

前の父親の物を使い果たしてもいない。たとえ、魔術をかけようとしたのではなく、信仰を望んでやったことだったとしても、お前は土地の神々の機嫌を損ねた。この土と石を元の場所に戻しなさい」

と言いました。

ミラレーパは悲嘆に打ちひしがれながらも、まだ信仰を渇望していたので、言われたとおりに土と石を元の場所に戻しました。両肩に痛みが走りました。

マルパは、妻から、ミラレーパが塔の仕事によって悲嘆しか感じていないということを聞き、ミラレーパを連れてこさせました。そして、ミラレーパに、三つの帰依と、基本的な戒についての説明をしました。続けて、

「これはすべての人に対する一般的な法則だ。

しかし、お前が秘密の教えを望むなら、これこそお前がしなければならないことだ」

と言って、ナーローパの解放と恐ろしい試練の話をしました。

「お前にはこの方法は難しいだろう。」

この言葉を聞いていると、ミラレーパの信は増大し、涙が流れました。そして、ミラレーパは、マルパの言うことはすべて実行すると誓いました。

数日後、マルパはミラレーパを散歩に連れ出し、言いました。

「この場所に、九階建ての白い四角い塔を建て、上の部分と尖塔を付けて合計で十階にするんだ。それが壊されるようなことはない。作り終わったら、秘密の教えを与えよう。そうすれば、瞑想のためにリトリートに入ることもできる。その間は食事を与えよう。」

ミラレーパは、ラマの妻をこの約束の証人にして、塔を建て始めました。

途中、マルパの高弟たちがふざけて大きな岩を転がしてきて、それを礎石として置きました。

二階まで建てたときに、マルパがやってきて言いました。

「偉大な魔術師よ、この石はどこから来たのだ。」

「あなたの三人の高弟方が、ふざけてここに持ってきたのです。」

「お前が建てている建物に彼らの石を置いてはいけない。だから、取り出して元の場所に戻しなさい。」

ミラレーパが言われたとおりに建物を上から壊して石を戻すと、マルパは、
「では、あの石をもう一度持ってきて、礎石として据え直しなさい」と言いました。
ミラレーパは、一人で三人分の弟子の力を振り絞り、岩を戻しました。
塔が七階までに達するころになると、マルパのいとこたちが妨害しようとしましたが、マルパは武装した幻の兵士を何人か作り出して塔の至るところに配置し、彼らの攻撃をやめさせました。恐怖に満たされたいとこたちは、マルパに敬意を表し、全員がマルパの弟子になりました。

## ■与えられないイニシエーション

ある時、ツァンロンのメートゥン・ツンポが、タントラの主神チャクラサンヴァラのイニシエーションを請いに、マルパのところにやってきました。
マルパの妻は、ミラレーパに、
「さあ、頑張って何としてでも、その教えを得るよう努力なさい」
と言いました。
ミラレーパは心で、
「わたしはこの塔を建てた。だれも石一つ、山羊の頭ほどの大きさの石一つですら、持ってきてはくれなかったし、かご一杯の土も、バケツ一杯の水も、ホッド（肩にかついで漆喰（しっくい）など

を運ぶ、長い棒のついた箱）一杯のモルタルも持ってきてはくれなかった。だからイニシエーションを受けるんだ」

と思い、マルパに挨拶してから他の人たちと一緒に座りました。

しかしマルパは、

「お前が建てたのは、わたしの腕の太さにも満たないほどの小さな塔だ。それは、わたしが大きな苦労をして、はるばるインドから持ち帰った教義には値しない。わたしの教えに値するものがあるなら、施せ。そうでなければ、ここで、秘密の教えのイニシエーションを受ける者たちと同席してはならない」

と言い、ミラレーパを平手で打ち、髪の毛をつかみ、放り出しました。ミラレーパは死にたくなって、一晩中泣きました。マルパの妻が来て、ミラレーパを慰めました。

翌日、マルパが来て、言いました。

「偉大な魔術師よ、塔は続けなくていい。塔の地下に、十二の柱のある、遮蔽（しゃへい）された通路に囲まれた祭壇室を造れ。そうしたら、秘密の教えを与えよう。」

ミラレーパは言われたとおりに造り、それがようやく完成するというころ、トゥルのツルトゥン・ワンゲが、グヒャサマージャのイニシエーションを請いにマルパのもとを訪れました。

ミラレーパも、マルパの妻からもらった布施の品を持って、参列しました。

しかし、マルパは言いました。

「これは、他の人がすでにわたしにくれた物

だ。わたしにわたし自身のものをよこすな。お前自身の物で与える物があるなら、取りにいけ。ないのなら、ここにいるな。」

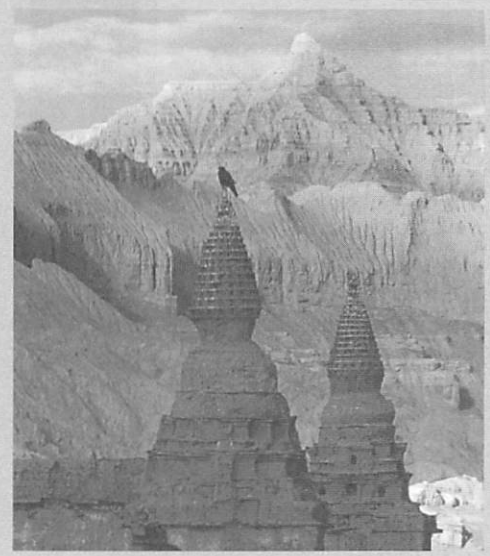
そして、立ち上がると、ミラレーパを罵り、蹴飛ばし、放り出しました。

ミラレーパは、大地に沈みたくなりました。「これは、わたしが魔術で行なった殺人と、雹で多くの収穫物をダメにした罰だろうか。ラマは、わたしがダルマを実践することができなくなるということをご存じだったのだろうか。それとも、慈悲がないから、わたしに教えてくださらないのだろうか。理由がなんであれ、信仰がなければけがれの集積でしかないこの人間の身体が何の役に立とう？　死んだ方がましかもしれない。」

マルパの妻が供物のケーキを一切れ持ってきて慰めてくれましたが、ミラレーパは食べようという気もなく、一晩中泣いて過ごしました。

ミラレーパの苦しみは、頂点に近付きつつあったのです。

（つづく）



# チベット仏教とミラレーパの系譜

◇チベット仏教「第二の流布」

チベットで最初に仏教が広まったのは八世紀前後のこと（日本では奈良の大仏が作られた時代）。ソンツェンガンポ王、ティソンデツェン王がインド仏教を取り入れ、聖者パドマサンバヴァなどが教えを伝えた。しかし、その後、仏教は弾圧される。

十世紀から十一世紀（日本では平安時代後期）、インドでは密教の流れが起こっていた。このインド密教を受け継ぐことになったのが、マルパやミラレーパをはじめとするチベット密教の系譜だったのである。つまり、この時代はチベット仏教の「第二の流布」に当たる。

◇カギュー派の系譜

ティローパはインドの偉大な瞑想修行者であった。彼は人間の根本グルを持たず、原初の覚者ヴァジラダラからの直接伝授を受けたとされている。また、四つの特別な直接伝授、非常に特別な四つの直接伝授も受けた偉大な師であった。

その教えを受け継いだのが、ナーローパであった。ナーローパはナーランダー大学で最も学識ある学者とされていたが、この僧院大学での生活を捨ててティローパの弟子となり、十二の大きな試練と十二の小さな試練を受け、そして完全な覚醒を得たのである。

チベットのマルパはインドへ赴き、そしてナーローパや他の師たちから法則を伝授された。こうして、ヴァジラダラからティローパ・ナーローパへと伝えられた系譜は、チベットへともたらされたのである。これはティローパの四つの直接伝授と、ナーローパの六ヨーガに関わっており、マハームドラーの教えも含む。また、マルパはマイトリーパからもう一つの教えの系統も受け継いだ。

マルパは三度インドを訪ね、そして膨大な教えを持ち帰り、翻訳した。インドでは十二世紀、イスラム教徒の侵略によって仏教が完全に滅んでしまったが、マルパによって教えはチベットに受け継がれ、聖なる教えの系譜は保たれたのである。

ティローパ

ナーローパ

マルパ

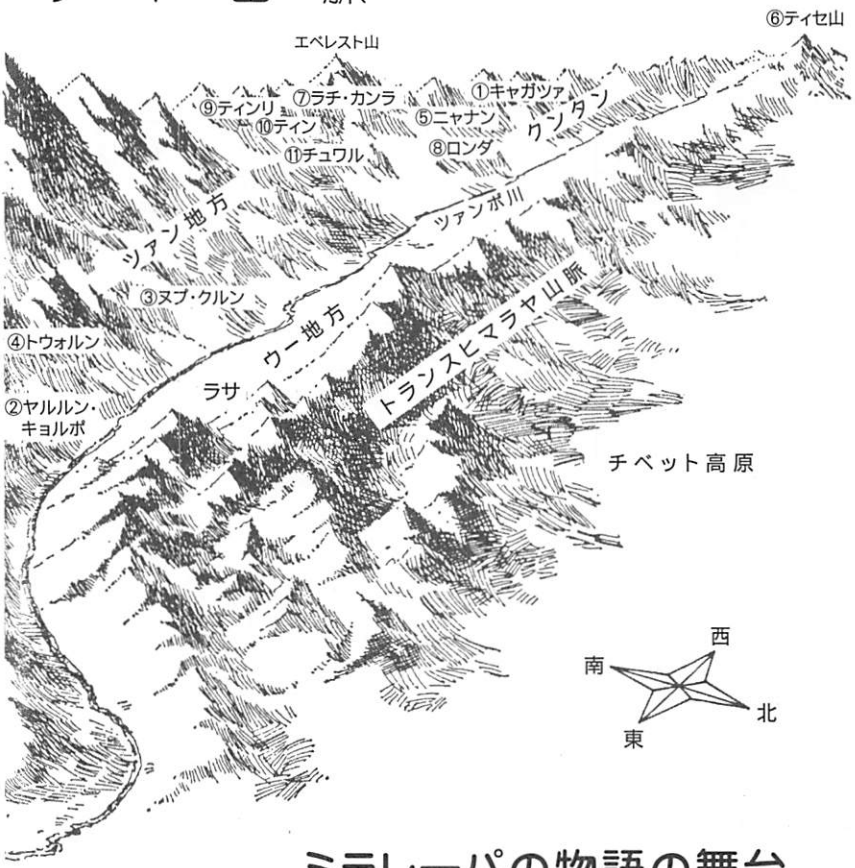
ミラレーパ

ガンポパ

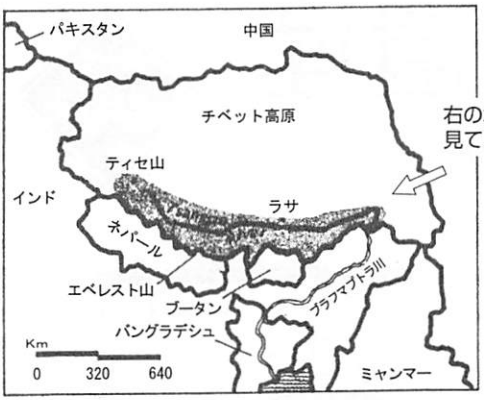
マルパの最も重要な系統保持者とされたのが、ミラレーパだった。ミラレーパは極端に質素な生活を続け、数々の神通を示した偉大なヨーガ行者であり、また多くの弟子たちを有していた。その一人が、もともとカダム派出身のガンポパである。

ティローパから始まり、ナーローパ、マルパ、ミラレーパ、ガンポパと受け継がれた系譜をカギュー派という。ガンポパ以後、カギュー派は多くの流派を生み出したが、その主流としてはカルマパで有名なカルマ・カギューがある。また、カギュー派は偉大な瞑想家を多数輩出しており、代表的な人としてカール・リンポチェ師が挙げられる。

# ラ ヤ 山 脈




ミラレーパの物語の舞台
南チベットの
ツァンポ川の渓谷




右の地図はこの方向から見ている。

注：ツァンポ川は東インドでブラフマプトラ川になる。

①キャガツァ
ツァとも呼ばれる。ミラレーパの出生地でクンタンに近い。ミラレーパが瞑想修行をしたタク・カルタソ・ウマ・ゾン（白い馬の歯の岩の洞窟）が近くにある。
②ヤルルン・キョルポ
ミラレーパが最初に黒魔術を学んだ村。
③ヌブ・クルン
魔術で死をもたらす方法を学んだ所。
④トゥォルン
マルパの村。ロタク地方にある。
⑤ニャナン
ミラレーパの住んだドゥーパ・ブク（胃袋のような洞穴）があるネパールとの国境近くの村。
⑥ティセ山
ティセ・ズトゥル・ブク（ティセ山の如意の洞穴）のある場所。ヒンドゥー語でカイラーサ山、サンスクリット語でメール山と呼ばれるティセ山は、仏教徒からもヒンドゥー教徒からも世界の中心とみなされている。
⑦ラチ・カンラ
エベレスト山付近の地域。キュンギ・ゴガ（征服された悪魔の素晴らしい洞穴）はこの地域にある。
⑧ロンダ
空を飛んでいるミラレーパが目撃された村。
⑨ティンリ
ミラレーパがとどまった多くの洞窟がある地域。
⑩ティン
ミラレーパが毒の飲み物を飲んだ所。
⑪チュワル
ミラレーパが亡くなった所。チュワルはティンの村の中にある。

Sacred inheritances

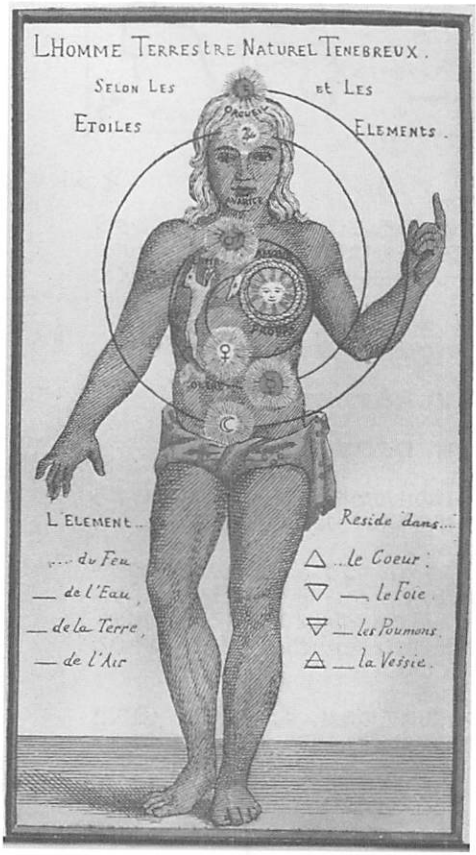
# 聖なる遺産

最終回

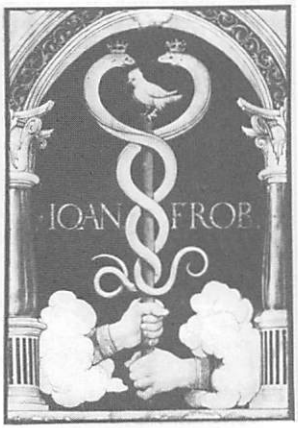
## 西洋にも見られる霊的シンボル

チャクラとクンダリニーの象徴は、驚くべきことに西洋にも多く存在している。西洋神秘思想の中でも重要な位置を占めるヘルメス主義。これを説いたとされる伝説上の人物、トート・ヘルメス・トリスメギストスが持つ杖がカドゥーケウス（左ページ）だ。

このカドゥーケウスには、クンダリニーの象徴である蛇が描かれているとともに、全体の形状が三本のナーディー、イダー・ピンガラー・スシュムナーの三管の形状と一致している。このように、カドゥーケウスとは、霊的身体を表現したシンボルなのである。




J.G.ギヒテルの『実践的神智学』1898版より
天体が人体エネルギーの各中心（もしくはチャクラ）と関係付けられている




（右）カドゥーケウスを持つヘルメス　18世紀
（左）カドゥーケウス。ホルバイン作　1523年

東洋と西洋、まったく異なるかに見える宗教文化は、実はその奥底で、霊的身体や霊的進化に関する共通の知識を有していた。

人間は、いかに現世の欲楽を楽しもうと、様々な苦しみ、そして老い・病・死という運命から逃れられない。不自由で不完全な存在だ。しかし、一方で人は内側に神秘的な可能性を秘めている。この神秘の力を目覚めさせることで、人間を超え、神に至り、そして解脱の境地に到達することができるのだ。

いにしえの賢者たちは、この秘儀を様々なシンボルの形で後世に伝えた。悠久の時を経て、わたしたちは今、秘儀の真意を知り、自分自身で体現することができるチャンスに巡り合っているのである。

（完）

# 深遠なる占術の世界

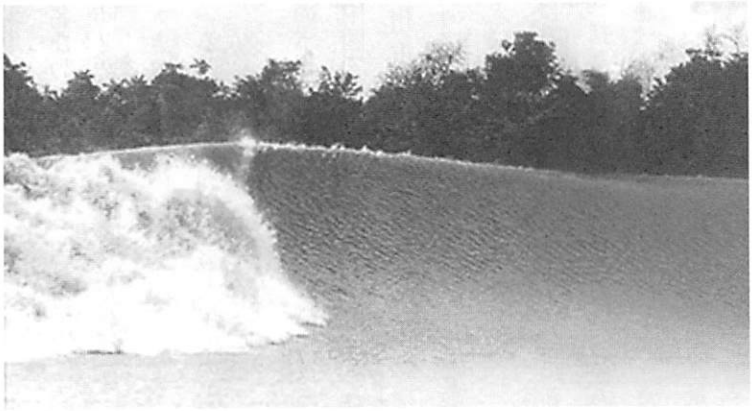
## 第五回　月の神秘的な力

### 逆流する大河の神秘

海には満ち干がある。遠浅の海などでは、満潮と干潮のときで海岸線が大きく違ってくる。これは、太陽と月の引力によって生み出された自然現象だ。特に、太陽と月と地球が一直線に並ぶ満月と新月のころは「大潮」と呼ばれ、満ち干の差が最大になる。実際には満月・新月から一～二日遅れて影響が現われる。

さて、満潮のときには当然、海面は高くなる。すると、海水が河口から上流へと逆流していくことがある。この現象を、日本語では海嘯（かいしょう）、あるいは川津波と呼んでいる。小規模なものは世界各地の河川で生じているが、巨大なものは観光の目玉となるほどすさまじい大逆流となる。

有名なのが、南アメリカ最大の川であるアマゾン川で見られるポロロッカだ。アマゾン川は、河口近くで大西洋からの潮流の流れとぶつかる。そこに大潮の影響が重なると、世界



ポロロッカで押し寄せる波は月の影響力を示している

一の流量を誇るアマゾン川を巨大な波が逆流していくのだ。

ポロロッカとは、インディオの言葉で「水の壁の崩れる大音響」を意味するという。ポロロッカの大きなものでは波高が一〇メートルを超え、最大一六～一七メートルにも及ぶことがある。これは五階建てのビルの高さに相当する。あまりにも巨大な「水の壁」といえよう。その轟音（ごうおん）は何キロも先まで響きわたるという。

この大逆流は、河口から三〇〇キロあたりまで逆流していく。その速度は時速一六～四十キロ。東京から名古屋ほどの距離を、月に引かれた太平洋の海水がさかのぼっていくのである。

大潮の時には逆流が起こるので、月二回は

この現象が見られるわけだが、その中でも特に有名なのは、二月から四月にかけての「春のポロロッカ」だ。この時期の大潮は特に干満の差が大きく、雨期の関係で川の水量が特に増えているため、年間でも最大規模の大逆流になる。

このポロロッカ以上に長距離に及ぶ大逆流は、中国で見られる。上海（シャンハイ）の南にある浙江（チョーチャン）省杭州（ハンチョウ）市。その南を流れるのが銭塘江（チエンタンチャン）だ。この河口はラッパ状になっているため、大潮のときには逆流が起こりやすい。

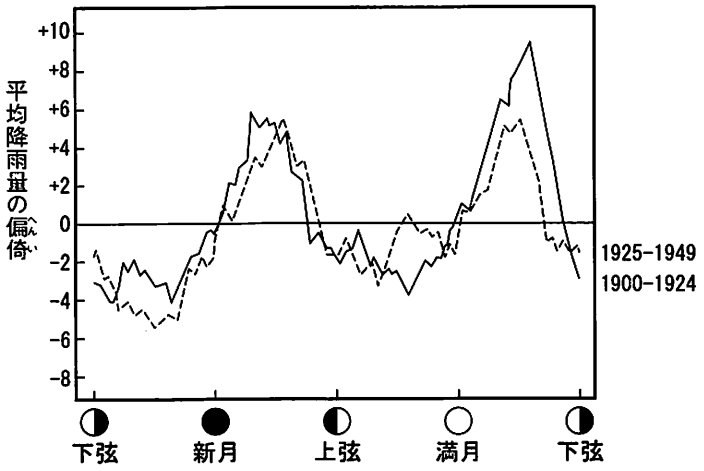
特に有名なのは、旧暦八月十八日（新暦だと十月）に起こる「銭塘の秋濤（しゅうとう）」だ。「八月十八日の潮、その壮観天下になし」という言葉もあるほど。この時期は台風の影響で流量も多いため、逆流も派手になる。河口から四一〇キロもの大逆流となり、その波の高さも八～一〇メートルに及ぶのである。

大逆流する銭塘の秋濤

## 満月・新月の後には雨が増え、地震は下弦の時期が危険

潮の満ち干に影響するのは月と太陽だが、地球に近いこともあって、月は太陽の二倍の影響力を持っている。それは、巨大な海の水にだけ影響するのではない。地球の大地そのものや、大気にも影響を及ぼしている。

一九六二年、アメリカの科学誌「サイエンス」に、膨大なデータに基づいて月齢と雨の関係を示す成果が発表された。このブラッドリーらの研究によると、新月と満月のあとの数日間、アメリカ全土での降水量が増えていることが判明したのである。これは、半世紀に及ぶアメリカ合衆国全域の資料であり、信憑性は高い。そして、これと同様の結果は、



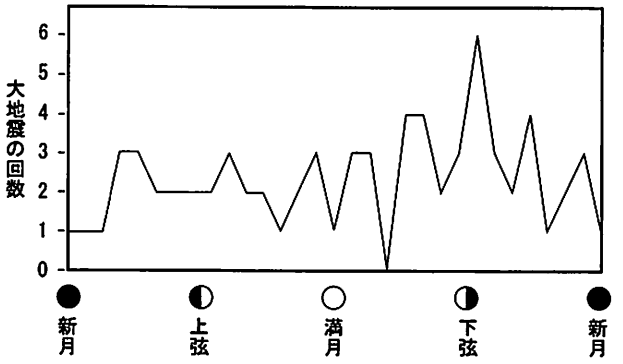

1900年から1950年の間に、全アメリカ測候所で記録された広範囲にわたる降雨量は、新月と満月のあとの数日に多かった。

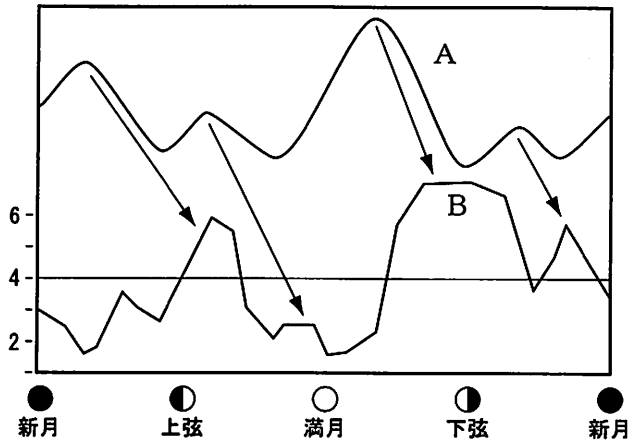
ニュージーランドや日本でも確認されている。

なぜこのような現象が起こるのか。月が大気に与える影響は、海や大地に与える影響に比べてはるかに小さい。おそらく、これは流星塵が関係しているのだろうと推測されている。宇宙から地球に降り注ぐ流星塵は、雨粒の核となる。月の引力の変動に応じて、地球に降る流星塵の数も増減し、雨そのものの量に関係してくる、というのだ。

また、月から大地に対する影響としては、地震と月齢の関係が推定されている。一九七一年、ロシアのバクー地質研究所のタムラジャン氏は、日本の地震学会機関誌「地震」に「日本の破壊地震の月齢について」という報告を行なった。

この報告によると、十八世紀以後の日本の破壊的地震（死者一〇〇〇人以上）一六例のうち、一四回は月齢二十日から五日の半月の間に起こっている。つまり、新月を挟んだ時期にほ






明治20年以降の日本付近で発生したマグニチュード7.0以上の地震の月齢位相にともなわれた変化（B）と、ブラッドリーの求めた世界的な降雨傾向の月齢にともなわれた変化曲線（A）の対応

とんどが集中しており、満月を挟んだ残り半月には二例しかない。

さらに、気象庁予報官の根本順吉氏は、明治五年から阪神大震災までのあいだに日本付近で起こったマグニチュード七・〇以上の地震について、発生時の月齢を調べた。すると、月齢十九日～二十四日の一週間に確かに多くなっている。下弦（つまり月が欠けていく時期）の一週間は、満月を中心とした一週間の三倍もの大地震が起こっていた。

月の満ち欠けと地震の間にどのような関係があるかについては、まだわかっていないが、先程の世界的降雨傾向と、地震の変化の曲線は、少しのずれを持って対応している。やはり何らかの月の影響があるものと考えてよさそうだ。

## 動物たちの行動を左右する月の運行

動物たち、特に水にすむ動物たちは、月の影響に敏感である。

ヨーロッパの北海のウナギには、月齢周期が見られる。月の下弦の終わりごろ、つまり新月に近付いたころ、一番よく獲れるという。また、マッコウクジラは、満月や新月のころに群団を組む傾向がある。

日本では、毎年初夏のころ、新月または満月の一～五日の間、つまり大潮のときの満潮に乗って、クサフグという小型のフグが大群となって産卵のために波打ちぎわに押し寄せる。釣りの餌にも使われるゴカイの一種バチの産卵浮遊は、十月と十一月の新月と満月のあとの大潮の時期に、満潮の直後に行なわれることがわかっている。

マサチューセッツ州の海洋生物研究所で、女性研究員マルゲリート・ウェブ氏は不思議なことに気付いた。カタツムリたちは、満月のときは東に向かっていき、新月のときには西に向かっていくのである。

ノースウェスタン大学の生物学者フランク・ブラウン博士は、その秘密を解明した。カタツムリたちは、月の引力による微妙な地球の磁力の変化を感じ取っていたのである。

ブラウン博士はもう一つの実験を行なっている。今度はカキだ。カキは、満潮になると餌をとるために殻を開き、干潮には被害を防ぐために殻を閉じる習性がある、ということをブラウン博士は発見した。そこで、満潮時刻が異なる別の陸地の研究室にカキを移して観察

した。すると、そこでも、その場所の潮に従って、カキは殻を開閉したのである。海を離れても、海洋生物は月の規則に従っていた。ということは、陸上の生物にも影響が及んでいる可能性がある。

月の見かけの形の変化は
地球への潮汐力の変化を伴っている

## 人間も月の影響を避けられない

ここまでの例を見てくれば、人間も月の影響を受けている、といっても疑う人はいないだろう。成人の人体の六〇～七〇パーセントは水分である。大河を逆流させ、動物たちに変化を与える月の運行が、人間にだけは影響しないなどということはありえない。

このように、月の引力の影響が人間を含む動物たちに及んでいる、という考え方を、バイオタイド理論と呼ぶ。

スタンフォード大学医学部のL・マイルズ博士らは、ある盲目の男性の生体リズムについての研究を行なった。生まれつき目が悪いこの男性は、睡眠リズムがひどく乱れるため、何年も苦しんできたのである。

実験室内で、脳波やホルモン、体内活動など、生理学的機能について長期的な調査が行なわれた。すると、この男性の体温や睡眠パターンには一定の周期があることがわかったのだ。それはすべて、二四・八時間という数値を示した。

この二四・八時間という周期は、月が南中してから次に南中するまで、つまり地球上から月を見たときにちょうど一周する時間（つまり、月を基準とした一日）とまったく同じだったのである。

実は、人間が地下壕で生活し、外界からの影響（例えば昼と夜の区別など）が一切捨断された状態で居続けると、二週間ほどの後には、睡眠・覚醒のリズムが約二五時間になることがわかっている。これはサーカンディアン・リズ

ムとか、フリーラン・リズムという。この「人間が本来有している体内時計の一日」が、「太陽の一日」である二四時間ではなく、「月の一日」である二四・八時間と非常に似ていることは、興味深い事実である。

人間の体調と月の関係も明らかになっている。前出の気象予報官・根本順吉氏によれば、手術のときの出血量が月齢と関係が深いことがわかったという。化膿する扁桃炎（へんとうえん）の手術や虫垂炎（ちゅうすい）の発病についても調べたところ、明らかに月齢に応じた変化が見られたのである。

これは驚くべきことに、「月齢と降雨の変化」のときのグラフと、ちょうど正反対の増減を示した。

これは日本だけではない。台湾の基隆（キールン）の症例でも日本とほぼ同じ結果が出た。また、アメリカ・フロリダの医師アンドリュウスは、扁桃摘出手術後に出血が過剰になるのが満月の日に集中していることを発見している。

手術のときの出血量は月の満ち欠けと対応していた

ここで興味深いのは、満月と新月では結果が違うことである。もし、これが月の引力による影響であれば、満月のときも新月のときも、ほぼ同じ結果が出るはずだ。実際、大潮は満月と新月の後数日間である。単純に潮汐力の影響だけでは説明できない「月の力」が働いていることが想定される。

## 「月からの潮汐力は微少だ」という「科学的」反論は無意味

現代唯物論科学の枠外にある考え方を目の敵にし、ひたすら否定し続ける「と学会」の山本弘会長は、月の周期が人間に影響を与える、といった考え方にも当然否定的である。そして、バイオタイド理論は非科学的な主張であると一蹴する。その根拠は何だろうか。それは、潮汐力というものが実際には極めて小さいということである。「あなたが今手にしている三〇〇グラムの本があなたに及ぼす潮汐力の方が、三八万キロ彼方の月があなたに及ぼす潮汐力よりはるかに大きいのである」と山本氏は述べる。

確かに、月からの力は小さい。この論拠は、占星学など「天体が人間に影響を及ぼす」という考え方を否定しようとする唯物論者が、猿まねのように競って引用する議論だ。しかし、月などの天体の影響は、これまで見てきたように決して無視できないというのも事実である。根本順吉氏はこう述べる。

「山本氏の反論は、一見科学的に見えながら、外の仕組みには考えをおよぼすことのできな

い独断的なものだと私は思う。……山本氏は、既知の物理的知識にもとづいて、そんなことはありえないことだと否定してしまう。しかしそれは、従来の潮汐的な仕組みだけを考えた否定であり、他の仕組みがもし考えられるなら、古来いわれてきた考え方は、全面否定できなくなるのである」

根本氏は、月が何らかの「信号（シグナル）」を伝えているのではないか、という仮説を立てた。たとえば道路を多くの車が走っている。そのためのエネルギー量は膨大なものだ。ところが、その途中に信号機が立っている。この信号を青から赤に変えたとしよう。車の流れは突然、止まる。信号を変えるために必要なエネルギー量は非常に小さいが、その影響力は極めて大きい。月の引力の影響が微少であったとしても、このような何らかの信号を伝えているのではないか、というのである。仮説にはすぎないが、非常に興味深いことだ。

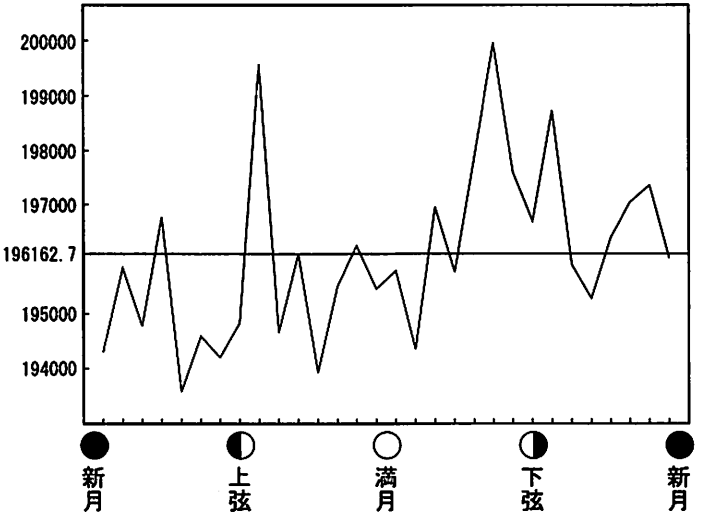
## 月は人の心を動かす

そして、月は人の心をも操るようである。ローマの月の女神の名前「ルナ」は、英語に入ってルナティックという言葉を生み出した。これは「月に影響された」という意味から転じて「精神異常者」「狂人」といった意味を持つようになった。またルナシーは狂気を意味する。

ローマやトルコの伝説では、満月の夜にオオカミに変身する狼男が登場する。満月のときには人は攻撃力を増す、と古くから考えられてきた。

月の満ち欠けと交通事故の発生件数の関係を調べたのが、兵庫県警交通部交通企画課の黒木月光（つきみつ）巡査部長（当時）だった。「月光」という名の巡査部長は、交通事故処理にあたる

全国の1982～1991年の人身事故



うち、事故と月齢との関係に気付く。

それは、月の引力が弱まる上弦の月・下弦の月の前後には、不注意から来る「うっかり型」の事故件数が急増しており、逆に月の引力が強まる満月・新月の前後には、事故件数は減るものの、「暴走型」の事故が多い、ということだ。満月・新月のときには集中力は高まる——それが行きすぎて狂気に至るのだろうか。

## 占星学ももとは実際の月の運行に基づいていた

占星学的にいえば、生まれたときの月の引力と、太陽の引力の関係が問題になる。つまり、潮汐力が強いか弱いか、月と太陽の力がどちらの方向に向いているか、によって、その人が引っ張り上げられている＝解放されているか、あるいは抑圧されているかを読み取ることができる。

また、そのときのエネルギーの方向によって、その人が何を目的として生まれてきたか、いつ達成するのかということも読み取ることができる。

四柱推命、奇門遁甲、六壬といった中国の占いも、もともとは天文から派生している。実際の星の配置・月の配置・太陽の配置、公転・自転の関係などをもとに計算されていた。そのため、当初は非常に的中していた。しかし、今の一般的な占術は、天文観測から離れ、周期性に基づいて計算される暦をもとに占うようになってしまい、価値のない要素が増えてしまっているのである。

## 月からの影響を脱するために

このように、月の影響一つをとっても、わたしたちは大きな外界からの干渉を受けている。しかし、修行はその外部からの影響から解放されていくための道である。もし、これらの外的影響を受けなくなっていくとどうなるだろうか。

ロシアの研究では、周囲のエネルギー――磁場、電場、X線をはじめとする光、音、その他――すべてを完全にシャットアウトすると、修行をしていないごく普通の人でもテレパシー実験に成功する、ということがわかっている。

わたしたちは通常、自分の考え、自分の思い、自分のイメージといった形で外界を見ている。しかし、それは、外的なデータ、目に見えない信号を受けることによって、わたしたちが日々修習している煩悩を生起させているにすぎない。それによって、真実を見通すことができなくなっているのである。

月の何らかのシグナルによって、わたしたちは体調や心の状態を左右されている、ということはすでに見たとおり。外部からの信号はわたしたちの目をくらませているのだ。しかし、多くの外部からの刺激をシャットアウトすれば、わたしたちが本来持っている能力を発揮することができるようになる。それは、ロシアの実験のような特殊な環境によっても実現できるだろうが、修行を進めて、外部からの刺激に対してまったく反応しないような状態に自らを作り替えていくことでも可能である。

わたしたちに大きな影響を与える月。その

影響さえも超えていくのが修行なのだ。

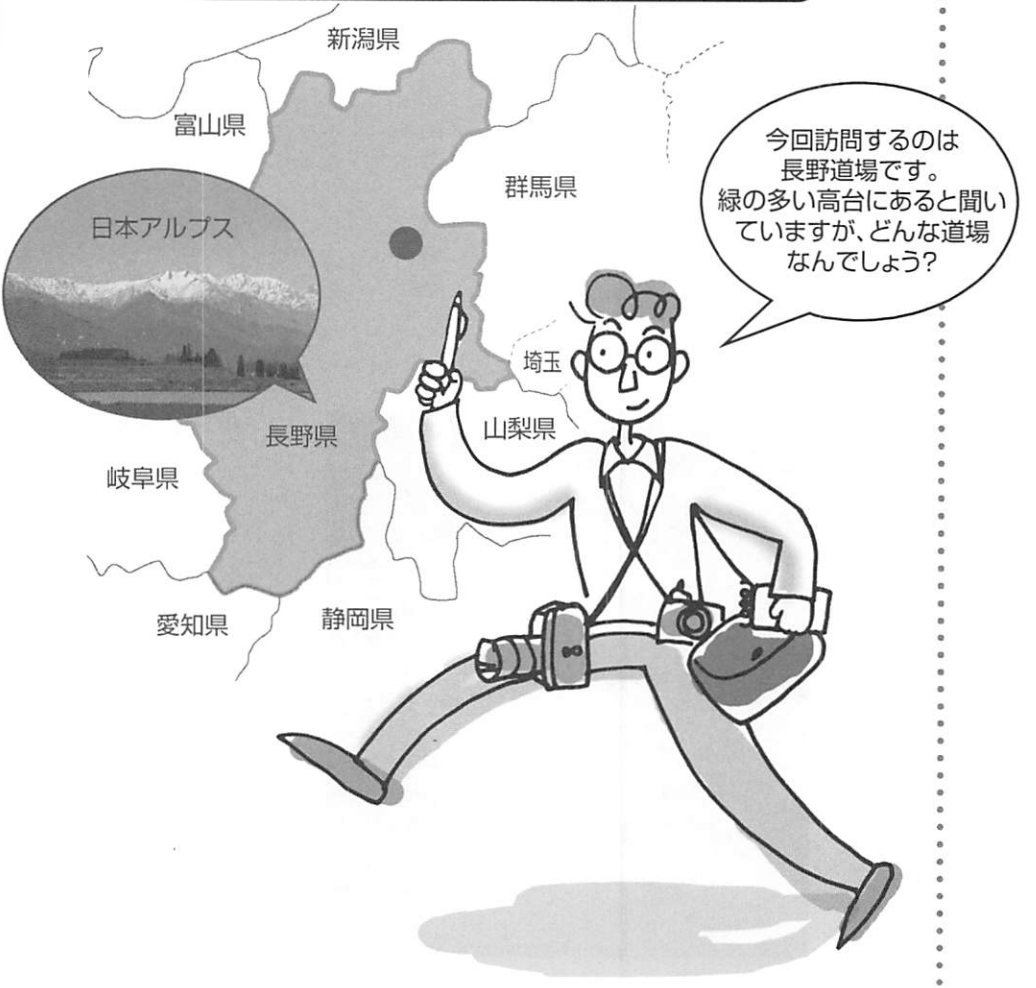
ところで、仏教の世界でも月の運行と関係の深い行事がある。それは戒誓行だ。現在の教団では、月に一回満月の日に、多くの出家修行者がまる一日の断食を実践している。また、戒に照らし合わせての懺悔（ざんげ）を行なうという意味もある。

伝統的な仏教用語では、この行事は「布薩（ふさつ）」と呼ばれた。新月と満月の日に出家修行者が集まって懺悔の会が開かれたと経典に記されている。また、後世になって、在家信者が月に六回、寺院に集まって八つの戒を守り、説法を聞いて、僧に供養することも布薩と呼ばれるようになったようである。

少なくとも月に一回、満月の日に心を鎮め、自らの一カ月間の心・言葉・行為を見つめ直し、法則に反したことがあれば二度とやらないと誓いを新たにすることは、わたしたちが月をはじめとする外界の影響を脱するために、非常に有効な手段なのである。

# アーレフの道場に行ってみよう！

## 謙太郎さんの道場訪問記
〈第４回：長野道場編〉



# アーレフの道場に行ってみよう！

〈第４回：長野道場編〉

「日本の屋根」と言われる日本アルプスがそびえ立つ信州・長野県。今日は、そんな、大自然の中に位置する長野道場を訪問しました。

**道場長・ソーパーカ師：**

「長野道場は、日本有数の活火山・浅間山の麓（ふもと）にあります。自然に囲まれた道場はとてもヴァイブレーションが良く、修行しやすい空間です。

そのような土地柄のせいか、信州の方は、現世的な価値観よりも、精神世界や〝内側の探究〟に興味を持っているピュアな人が多いですね。また、最近は、若い人たちが修行を頑張っています。

この道場には、県内からだけでなく、群馬・新潟からも、会員さんがやってきます」

（右）雄大な浅間山。
澄み切った空気も心地良い。

（左）道場では、説法会や勉強会のほかに、ミニセミナーや儀式ヨーガなども行なわれる。

## ■長野道場ってどんな所?

さっそく、会員の方に、道場の様子を聞いてみました。

**会員Aさん**：広々とした風景が広がる山の麓にあります。とてもすがすがしく、道場内は太陽の光が降り注いで明るい感じがします。サマナの方々は気さくで何でも話せます。とにかく明るく、年も近いということもあって身近に感じます。

**会員Bさん**：地元出身のサマナの方も多く、法友同士のつながりが強力です。昔からの仲間っていう感じですね。

**会員Cさん**：アットホームな感じです。音楽好き・踊り好きの若者たちが頑張っています。

**会員Dさん**：わたしの家はここよりも町中にあるのですが、道場に近づくにつれて、どんどんさわやかになっていきます。まさに自然の中の道場という感じで、毎日の仕事の疲れも、道場に通うことでいつも癒されます。

道場を訪れて思ったのは、やはり若い方が多いなということ。法友同士、互いに声をかけ合い、励まし合いながら修行を頑張っているそうです。

最近、友人に導かれて入会したというKさんにインタビューしてみました。

# アーレフの道場に行ってみよう！

〈第４回：長野道場編〉

**Q**：入会のきっかけは何だったんでしょうか。

**Kさん**：わたしは、高校を卒業した頃からだんだん苦しみが多くなってきて、道を求めていました。そんな時、友人からアーレフを紹介してもらい、入会しました。

**Q**：毎日来道して、長時間修行していると伺っていますが。

**Kさん**：はい。仕事が終わって道場に来て、教学と立位礼拝を中心に毎日3時間、日によっては5時間くらい修行します。自分自身、アーレフの修行の効果を実感していますし、イニシエーションによっても大きく変わってきたと思います。

ソーパーカ師に伺ったところ、Kさんは、一番早く道場に来て、一番遅くまで黙々と集中して修行していかれるとのこと。新人の方も頑張っているんですね。

## ■アーレフの修行を始めたきっかけは？

他にも、ここ1年くらいの間に修行を始めた方々が何人かいらっしゃったので、そのきっかけを伺ってみました。

**Eさん**：わたしは、7年ほど離れていた状態での再入会です。導かれて、改めて、教団がしっかりと高い世界、グル方、神々の世界とつながっており、上昇のエネルギーのある団体なんだなということを実感しました。観念的には抵抗があったのですが、自分の守護神や神々にすべてを任せて導いていただこうと思ったとたん、喜びの心が出てきて、すぐに入会しました。

**Fさん**：わたしは元々、自分を変えたいという欲求があり、模索している時にアーレフのホームページに出合いました。「ここなら、自分を変えることができるかもしれない」と思ったので道場に連絡を取り、修行を始めました。正大師のお話を聞くようになってからは、人に優しく接することができるようになったと思います。アーレフの修行を続けていくことにより、これからも変わっていけそうな気がしています。

**Gさん**：数年前に大けがをしたことがきっかけで、普通の煩悩が満たせなくなり苦しみました。それがきっかけで、煩悩を否定しているアーレフの教えに惹かれ、修行を始めました。

動機はさまざまですが、皆さん、強い信と目標をもって修行されているんだなということが伝わってきます。真理の教えによって、現世では得

# アーレフの道場に行ってみよう！

〈第４回：長野道場編〉

## ◆ 長野の会員体験談「修行でみるみる健康に！」◆

わたしは、書店で購入した正大師の本を読み、手紙を出したことがきっかけで導かれました。それまでは「なんで自分だけこんなに苦しいんだろう、なんで世の中はこうなんだ」と不平不満ばかりでしたが、アーレフの「苦の詞章」を知り、自己の苦しみを喜びとできることは素晴らしいと思って入会しました。

それからは、さまざまな変化がありました。

例えば、入会したばかりの頃は、１日40本タバコを吸っていましたが、今では１日4本に減りました（吸ってもまずいと思うようになってきたので、いずれやめられると思います）。

また、入会前 120kg あった体重が、経行（きんひん）修行をするようになってから 108kg に減り、食事も自然とセーブできるようになってきました。糖尿病だったのですが、入会してから尿に糖がでなくなり、ちょっとした薬を飲むだけですむくらいに回復してきました。

このように、現世の喜びに溺れて自堕落な生活をしていたわたしでしたが、アーレフの修行を始め、カルマの法則を学ぶことにより、戒律にのっとった正しい生活を送る習慣が自然と身についてきたのです。

ることのできない、真の幸福を得ていただきたいなと思います。

## ■道場長のソーパーカ師について

道場長のソーパーカ師はどんな方か、会員の皆さんに語っていただきました。

**Hさん**：ソーパーカ師は、話をじっくり聞いてくださり、法則に基づいたアドバイスを論理的にわかりやすく話してくださいます。力業で引っぱるというやり方は決してせず、しみじみと法則を説いて、心から納得させてくださるので、相談をするにしてもとても信頼できます。

**Lさん**：わたしが鬱で苦しんでいるときに的確に対処法を教えてくださいました。見かけはクールですが、慈愛に満ちた方だと思います。

**Iさん**：ソーパーカ師は行法がとても上手です。以前、わたしが間違ったやり方でヴァヤヴィヤをやっていたとき、それに気づいた師は、とてもていねいに教えてくださいました。大変うれしかったです。教えていただいた正しいやり方でやると効果が全然違いました。

# アーレフの道場に行ってみよう！

〈第４回：長野道場編〉

（上）説法会の後、１カ月の修行の決意を達成した方に、手作りのジャンボクッキーが伝授されていました。

（左）陽光が差し込む明るい道場。
法則に長けたソーパーカ師の説法はとても好評です。

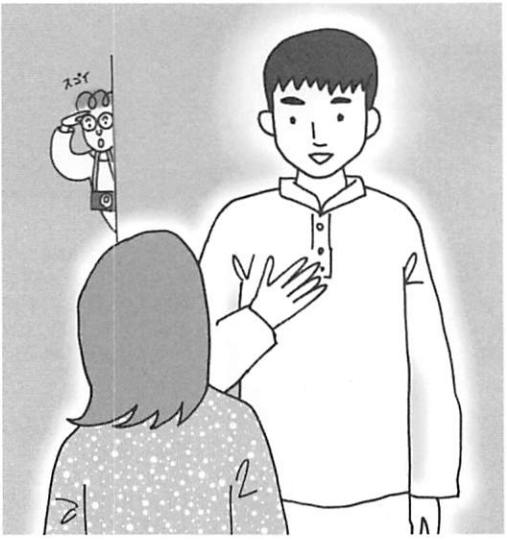
**Sさん**：法則の理解がすごく深くて、ためになる説法をたくさんしてくださいます。真面目で不放逸な師の姿を見ると、大変感化されます。

どの会員さんも、いろいろなエピソードを挙げてコメントをくださいました。「法則に忠実」「誠実で信頼できる方」というコメントが特に多いですね。

また、エネルギーのヨーガであるクンダリニー・ヨーガの成就者だけあって、お話しするだけで引き上げられた等の体験談も豊富です。

**Mさん**：以前、修行から帰られてすぐにお話をさせていただく機会があったのですが、その時沈んでいた心が一気に肯定的で明るくなったことがありました。

**Jさん**：師が修行から出てこられると、自分の光が強くなる感じがあるので、すごいなと思います。それと同時に、それだけ、ご負担も大きいだろうなと思うと申し訳なく、自力で少しでも頑張らなければと思います。



**Pさん**：ソーパーカ師には精神的にも肉体的にもいつも助けられています。そこにいるだけで私たちを助けてくれるような存在です。成就者とはそういう方々なんだと思います。

**Wさん**：勉強会は、いつも、ソーパーカ師のご修行中の体験談や、法則をわかりやすくまとめあげた内容などを中心に、大変中身が濃く充実しています。エネルギー的にもずいぶん引き上げられ、意識も上昇します。すごく貴重で大切な時間です。しっかりメモを取って後で何度も修習しています。

**Zさん**：道場等でお話しした後、自分が肯定的になっていたり、元気になっていたりして、確実にエネルギー交換が起きていることを感じます。

# アーレフの道場に行ってみよう！

〈第４回：長野道場編〉

## ■これからの長野道場

長野道場は、都市部の道場に比べるとひっそりとした小さな道場であるにかかわらず、正大師の説法会も毎月のように行われ、師だけでなく聖準師もフォローされており、会員さんが受けている恩恵は大きいと思います。

まだまだ、真理と縁のある方、精神世界に興味を持つ若者たちがたくさんいそうな長野。

今後も、縁ある多くの方に、真理を知ることによって幸福を得ていただきたいな、と願わずにはいられませんでした。

### 長野道場メモ

ホームページ：
http://nagano.aleph.to/
メール：nagano@aleph.to
TEL：0267-22-9700

# 右足切断のピンチを修行で乗り越えた！

四国連絡所 Yさん

# わたしの修行実践記

このコーナーでは、アーレフの修行の体験談をご紹介します。

# クンダリニー・ヨーガ成就者の修行体験談

今年八月と九月に、クンダリニー・ヨーガの成就者である師の特別な修行プログラムが組まれ、厳しい修行が集中的に行なわれた。その体験からいくつかご紹介したい。

## ●瞬間瞬間、全力でやって乗り越えた
### ――イシダーシー師

修行日程が半分ぐらい終わったところで、立位礼拝二十四時間に挑戦することになりました。最初は年齢的なことで躊躇したのですが、「自己の苦しみを喜びとし、他の苦しみを自己の苦しみとする」という菩薩の発願をしているわけですから、苦しくてもやらなければならない、と決意して、二十四時間の立位礼拝を始めました。最初に二十四時間が一日、後の二日間は六時間立位礼拝をやって究竟、また礼拝・究竟……の繰り返しをやり続けました。

もちろん、深い意識に入っていくものですから、ろれつは回らなくなって、口が動かなくなったりもしました。しかも、お腹から声を出し続けなければならない。意識のけがれの多重層に当たってしまったときには、淡々とできなくなるときもありました。しかし、もう必死で**瞬間瞬間、全力でグル方に意識を合わせようとして乗り越えた**のです。

結果的には、思ったより淡々とできるようになりました。そして、終わった後は**心がものすごく軽くなりましたね。**

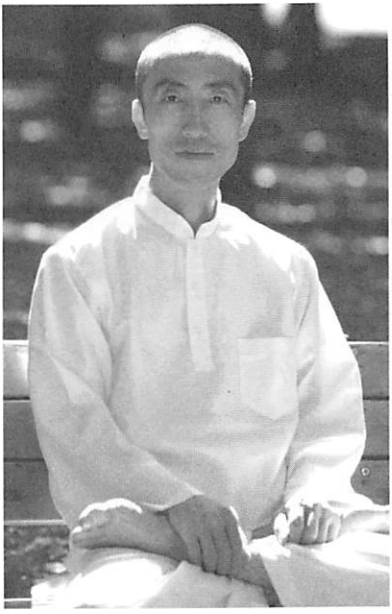
## ●恐怖心のない輪廻転生を実感した
### ——ビルパ師

二十四時間の立位礼拝を二日間終えた後、夢見のヨーガの修行をさせていただきました。

立位礼拝の二日目には、すでに祝福を受けたような体験をしていました。声が出ないつらさを感じながら礼拝を続けていると、ダルドリーが起こって、声が少し出るようになりました。さらに頭頂のほうからかなりエンパワーメントを受け、そのエネルギーはそのまま温存されて、翌日の体験につながっていったのです。

二十四時間の立位礼拝が終わって、夢見のヨーガの経典読みを三十分ぐらいやり始めたときに、もう呼吸をしなくていい状態になりました。アナハタ・チャクラのところから、心臓を含めてエンパワーメントを受けた感じが全身に広がっていきました。それが広がりきったときに、**感覚が停止し、息をしなくていい状態**になってしまったのです。そこで、なるがままに任せようと考えました。

これは死の経験ですね。恐怖なしに、すんなりと感覚の停止や呼吸の停止を経験したので、**「恐怖心のない輪廻転生というのは確実に起こるんだな」**と実感させていただきました。



## ●無心の礼拝でじんましんが突然消滅した
### ――ヴァーラナ師

今回はひたすら立位礼拝をし続ける修行をしたのですが、いい経験をしました。

受けたカルマが蓄積していたと思うのですが、立位礼拝前の蓮華座で、足の当たる部分が少しずつ腫れるようになっていったんです。じんましんが膨らんでいって、赤みが増えていったのです。手で触れたところがどこでもじんましんになっていくようで。

立位礼拝をしていると、体が熱を帯びてきます。すると、足全体がかゆくなってくるんです。トイレに行ったときに見てみたら、太股とか足が見たこともないような腫れ方になっていました。ギョッとするような腫れ具合で。

その上、膝の皿の部分が変な感じに動き始め、足の筋の状態も悪くなって、二十四時間の立位礼拝が終わったあと、歩けなくなっていたんです。そこで温熱もさせてもらいましたが、改善されませんでした。

ところで、このとき、わたしの近くである師が立位礼拝されていました。スピードといい、声の出し方といい、とにかく素晴らしい礼拝だったんです。立位礼拝中も心の中で「こういう修行者と一緒に修行できるのって幸せだな」って思っていました。それで、その師に尋ねてみたのです。

「今回はつらくなかったんですか」

「いや、つらいよ。つらいんだけど、つらくないようにするんだよ。何も考えずに一生懸命やる。自分は立位礼拝マシーンだ、機械だから一生懸命やっている、と考えて」

礼拝はやっていくうちに無心になっていっ

て、淡々とできるようになるものですが、つらいときには、かゆみや痛みなど余計なことをいろいろ考えてしまいます。その師の話を聞いて、とにかく、肉体的につらい状態のまま礼拝しようと思って、始めました。

自分の苦痛については考えないようにして、自分なりに二時間ほど全力でやったところ、気が付くと、さっきまで真っ赤っかだった手の腫れが引いてるんです。普通の色に戻っていました。そこでトイレに行って見てみたら、今まであったじんましんが全部消えていたんです。

**立位礼拝はすごい**、と実感しました。自分の力で何とかしようとしているうちは、温熱なども全然効果がなかったのに、**すべて忘れて帰依一本になったら全部消えてしまった**んですね。つらくてもとにかく耐え抜いて、ひたすら帰依の修行をできるようになれば、カルマは消え去るんだよ、と教えられたように思います。

修行の原則ではありますが、やはり体験するとうれしいものです。蓄積したカルマもそれで浄化されましたし、今回は非常にいい体験をしました。

## 「聖者の言葉」

いまだに飢えた生命体たちがいる。もし、その貧困をなくすことによって布施の徹底となるのだとすれば、過去の覚者方はどのように布施の徹底を完成したのだろうか。布施の徹底とは「すべてのものを、布施の結果とともにすべての人に与えよう」という心による――と説かれている。つまり、布施の徹底とは、心の状態にほかならない。

魚などの生き物を殺さないようにするために、それらが殺されない場所に遠ざけておくべきだろうか。しかし、それは不可能だ。「殺そうという気持ちを捨て去った心を得たことが、持戒の徹底である」と説かれている。

粗暴な生命体たちは、虚空のように無限にいる。彼らを滅ぼすことはできない。しかし、怒りというこの心一つを滅ぼせたなら、すべての敵を滅ぼしたようなものだ。

この大地を皮で覆うとしたら、どうして皮が足りるだろうか。しかし、靴底のみに皮を貼れば、すべての大地が覆われているも同然だ。

このように、わたしは外界の事物すべてを追い払うことはできない。しかし、わたしのこの心を追い払うことができたならば、どうして他のものを追い払う必要があろうか。

シャーンティデーヴァ

『入菩提道論』より

## 指名手配者に関する情報提供の呼び掛け

これまで教団では、捜査当局より指名手配を受けている旧団体信者に対して、繰り返し出頭を呼び掛けてきましたが、以下の三名については、いまだにその消息がつかめません。

教団では、この三名に対して改めて出頭を呼び掛けるとともに、すべての教団関係者に情報提供を呼び掛けます。何か関連する情報をお持ちの方がいらっしゃいましたら、どんなささいなことでも、最寄りの各道場までご連絡ください。

（名前）　（旧団体在籍時の呼称）

平田　信　ポーシャ

高橋克也　スマンガラ

菊地直子　エーネッヤカ・ダーヴァナ・パンニャッター

二〇〇三年十月　宗教団体アーレフ

## アーレフ信者に対する慈善活動の呼び掛け

宗教団体アーレフは、旧教団の一連の事件の反省に立ち、事件被害の全額を賠償する契約を締結し、三年以上にわたり、誠意を持って同契約を履行してまいりました。

今後は、その契約を確実に履行し続けるとともに、信者個人の活動として、

（1）今回の米テロ事件による被害者に対する寄付等の支援

（2）アフガニスタンの難民など、対テロ戦争の被災者への寄付、物資等の支援

（3）その他、テロの温床ともいわれるイスラム社会などの貧困、難民問題を解消する支援

を行なうことを呼び掛けたいと思います。

約三千人の人命を奪った米国同時多発テロ事件は、炭疽菌事件や、米軍が開始したアフガニスタンでの対テロ戦争による民間人の被害者や多数の難民の発生によって、被害者、被災者は拡大の一途をたどっています。

これらの事件は、教団と直接的な関係は全くありませんが、旧教団の一連の事件が与えた影響を考えると、その被害者の救済をすることも、アーレフの信者にとって重大な責務であると考えます。

さらに、こうしたテロ事件、対テロ戦争による被害者を支援するだけでなく、テロリズムを生み出している先進国と途上国の貧富格差、貧困・飢餓問題や、その遠因となる地球環境問題といった深刻な社会問題についても、それを解消するための積極的な慈善活動を行なうことによって、将来のテロの未然防止に貢献するべきだと考えます。

よって、宗教団体アーレフは、これらの支援活動を、二十世紀の旧教団活動の贖罪と、二十一世紀の理想の社会の実現のために、すべての信者に呼び掛けます。現在、教団・信者に課せられている賠償契約による経済的負担は重たいものがありますが、現在進行している被害を軽減し、未来の悲劇を防止することは、過去の清算と同じほどに重要であり、さらには、現教団が、旧教団とは違ってテロを否定し、その理想を実現しようとするスタンスの証の一つとしても、行なうべきだと思います。

最後に、もしわたしたちの声が届くのなら、事件当時まで旧教団に在籍していた元信者の方々についても、わたしたちと同様の責任に基づいて、上記の支援活動に対する賛同と協力を求めたいと思います。

詳しくは、
webmaster@aleph.to
TEL：03-3305-6732
(アーレフ代表)まで。

## サリン被害者の無料検診に対する支援呼び掛け

旧教団によるサリン事件等の被害者は、今もなお、様々な後遺症に苦しまれています。

二〇〇〇年三月、サリン事件被害者に対する集団検診は、「サリン事件等共助基金」によって、検診費用無料で行なわれました。しかし、二〇〇一年は、公的支援が得られない中で、同基金の資金難のため、一時実施が見送られていました。

その後、医師などの関係者の努力によって、将来にわたって検診を継続して行なうために、新しい民間団体「リカバリー・サポート・センター」が、同年八月に設立されました。その結果、十月から十一月にかけて、東京・埼玉の三会場で無料検診が実施され、多くの方が無料検診を受けることができました。この結果によると、検査を受けた人の八割以上に、何らかの目の異常が見られました。しかも、こうした目の不調を訴える人の割合は年々高まっています。

同センターは、二〇〇二年三月二十日、東京都から、NPO法人の認証を受け、登録しました。しかし、今後も、国からの援助が見込まれないので、もっぱら、民間団体・個人から集めた寄付金で、検診経費や運営費を拠出していくそうです。

破産管財人を通じた被害者賠償を遂行していくことは、教団の最も大きな責務であることは、言うまでもありません。そして、今も消えない事件の後遺症から、目を背けることもできないでしょう。その後遺症からの回復に直接的に役立つ検診と治療活動に、できるだけの貢献をすることも、アーレフ信者にとっては過去の贖罪の一部として、極めて重要であると考えます。

事件に対する社会の関心が薄れていく中、当事

者であるわたしたちこそ、事件が残した被害の実態と現実にしっかり目を向け、その回復のために力を注ぐべきだと考えます。

そして、過去の教団を有形無形に支えてきた現教団の信者、旧オウム真理教の元信者の人に対して、本来ならば、わたしたち自身がなすべきであった、この検診事業への協力を呼び掛けます。

## ●リカバリー・サポート・センターについて

このリカバリー・サポート・センターでは、会の趣旨への賛同者に、年齢・性別・国籍を問わず、会員もしくは準会員として、活動への協力を呼び掛けています。

・正会員　年会費1口　1万2千円――1口以上
・準会員　年会費1口　　6千円――1口以上

会員には、総会（年1回）の案内のほか、広報誌（年2回以上）が提供されるそうです。
また、同会では、会員登録者以外からも、広く一般の寄付を募集しています。

振込先は以下のとおりです。

三井住友銀行　　新宿御苑前支店
口座番号（普通）7232785
新宿一郵便局　口座番号　00130-8-70226番

口座名称はいずれも「トクヒ）リカバリー・サポート・センター」です。

リカバリー・サポート・センター（理事長：木村晋介）
〒160-0022　東京都新宿区新宿1-15-6　オリエント新宿201号
TEL 03-5919-0878　FAX 03-5919-0876

詳しくは、webmaster@aleph.to / TEL：03-3305-6732（アーレフ代表）まで。

# あなたに絶対の自由・幸福・歓喜を約束する
## ——宗教団体アーレフ

心身の悩みを解決したい
超健康体を得たい
豊かな生活を送りたい
素晴らしい人間関係を築きたい
さまざまな能力・超能力を開発したい
来世も幸福に生きたい
クンダリニーを覚醒させたい
解脱し、悟りを得、永遠の幸福を得たい
多くの人々を救済し、真に幸福にしてあげたい

最高の教義、無上の奥儀、そして解脱した指導者たちのもと、すべては確実に実現します。

◇アーレフが誇る、世界でも稀に見る修行体系

アーレフの修行システムにおいては、

◆上座部仏教・大乗仏教・チベット密教の、初歩から最奥儀までのさまざまな瞑想を含む修行法
◆ヒマラヤ・ヨーガの数々の秘法
◆アーサナ（座法、体位法）、プラーナーヤーマ（調気法・気を強める呼吸法）、ムドラー（クンダリニー覚醒の秘法）といった伝統的ヨーガ技法
◆気を浄化・強化・循環させる仙道の秘法

など、数々の貴重な修行法を学ぶことができます。それにより、健康・能力開発・現世の願望成就・心の安定などはもちろんのこと、数年で解脱・悟りの境地に達することも可能になります。

※資料請求券を貼付したハガキ、あるいは電話・電子メールにてご連絡ください。
詳しい資料をお送りします。

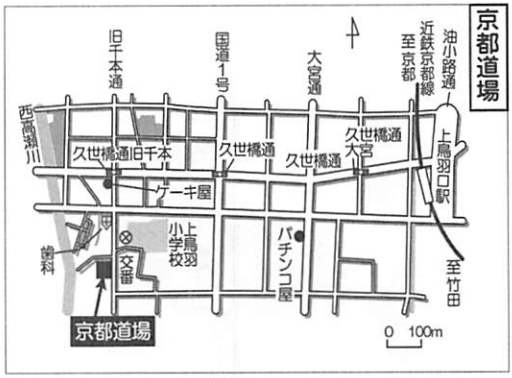
ハガキの宛先は

〒157-0062　東京都世田谷区南烏山6-33-15-101
宗教団体アーレフ　資料請求係

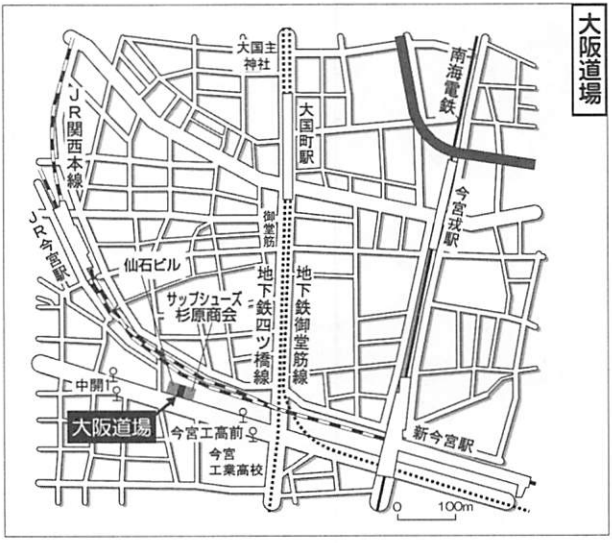
各道場の電話番号・電子メールアドレスは、
次ページをご参照ください。

（キリトリ線）
進化 vol.34
資料請求券

●京都道場
HP：http://kyoto.aleph.to/
メール：kyoto@aleph.to
TEL：090-8192-7160
〒601-8172 京都市南区上鳥羽鍋ヶ渕町1-5
（近鉄京都線「上鳥羽口」駅から徒歩15分）




●大阪道場
HP：http://osaka.aleph.to/
メール：osaka@aleph.to
TEL：06-6647-7131
〒557-0022 大阪府大阪市西成区中開1-2-12 東晃ビル4F
（ＪＲ大阪環状線・関西本線、南海電鉄、地下鉄御堂筋線 新今宮駅から徒歩10分／四ツ橋線 大国町駅から徒歩10分／ＪＲ関西本線 今宮駅から徒歩7分）




●四国連絡所
HP：http://shikoku.aleph.to/　メール：shikoku@aleph.to　TEL：090-3789-8808

●福岡道場
HP：http://fukuoka.aleph.to/　メール：fukuoka@aleph.to　TEL：092-483-2166

●沖縄出張所
HP：http://okinawa.aleph.to/　メール：okinawa@aleph.to　TEL：098-882-3948

## 各道場案内

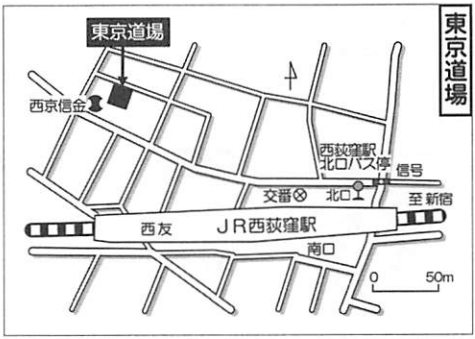
●札幌出張所
HP：http://sapporo.aleph.to/　メール：sapporo@aleph.to　TEL：011-859-2188

●仙台道場
HP：http://sendai.aleph.to/　メール：sendai@aleph.to　TEL：022-723-6370

●水戸道場
HP：http://mito.aleph.to/　メール：mito@aleph.to　TEL：029-257-1513

●船橋道場
HP：http://funabashi.aleph.to/　メール：funabashi@aleph.to
TEL：047-403-8919

●東京道場
HP：http://tokyo.aleph.to/
メール：tokyo@aleph.to
TEL：03-5303-1917
FAX：03-5303-1974
〒167-0042 東京都杉並区西荻北3-16-8　101号室
（ＪＲ中央線西荻窪駅から徒歩５分）

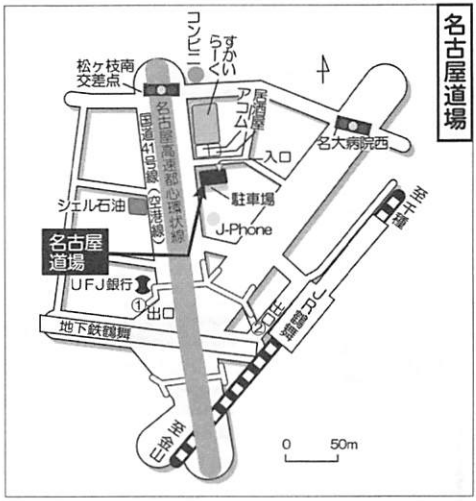



●横浜道場
HP：http://yokohama.aleph.to/
メール：yokohama@aleph.to
TEL：045-243-8079

●金沢道場
HP：http://kanazawa.aleph.to/
メール：kanazawa@aleph.to
TEL：070-5145-4233
（受付時間：13:00-18:00）

●長野道場
HP：http://nagano.aleph.to/
メール：nagano@aleph.to
TEL：0267-22-9700

●名古屋道場
HP：http://nagoya.aleph.to/
メール：nagoya@aleph.to
TEL：052-249-5470
〒460-0012　愛知県名古屋市中区千代田５丁目21番１号 伊藤ビル２
（ＪＲ中央本線／地下鉄鶴舞線「鶴舞」駅から徒歩５分）



■VOL.29（2003年4月号）

**特　集**　6人の聖準師が誕生！道場活動の新たな救済の柱に

■ウッタマー正悟師のハピネス・トーク 第1回 「貴方は整形美人、それとも心美人？」

■VOL.30（2003年5月号）

**真理アカデミー特集**　心の乱れと肉体

**特別記事**　神秘の霊石が現代によみがえった　ヒヒイロカネの秘密

■マイトレーヤ正大師説法――「詳説・カルマの法則／カルマ・ヨーガの実践方法」

■VOL.31（2003年7月号）

**特　集**　2003年5月　マイトレーヤ・アクエリアス・セミナー

――バクティ・ヨーガの心を培う修行プログラムと、聖なる法輪と甘露の祝福

マイトレーヤ・アクエリアス・イニシエーション

■マイトレーヤ正大師説法――「バクティ・ヨーガとカルマ・ヨーガ――愛と智慧の獲得を目指して」

■VOL.32（2003年8月号）

**特　集**　真理のサウンドスケープ――音と音楽の与える影響

■VOL.33（2003年9月号）

**巻頭レポート**　2003年8月　来世を確定させるセミナー

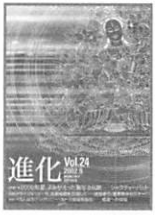
――「自力の修行」と「三宝への帰依」

**特　集**　「記憶修習」――繰り返すこと、根付かせること

■法則を語る　カンカー・レーヴァタ正悟師

「与えること」と「奪うこと」――大乗の修行の素晴らしさ

## 進化バックナンバーのお知らせ




■VOL.24（2002年9月号）

**特集1** 2002年夏、よみがえった聖なる伝統　マイトレーヤ正大師シャクティーパット
**特集2** 成就への道――ラージャ・ヨーガ、在家成就を目指して――成就修行レポート（8月10～18日）躍動のときに向けて――夏季集中セミナーレポート（8月13～18日）
**特集3** ウパサマー師、クンダリニー・ヨーガを成就！

■VOL.25（2002年10月号）

**特集1** マイトレーヤ正大師シャクティーパット・インタビュー
**特集2** マイトレーヤ正大師の「的中した社会・経済予測」第2弾
■マイトレーヤ正大師説法――「真理の本質――すべては心の現われ／今こそ徹底した功徳の実践を」

■VOL.26（2002年11月号）

**特集1** マイトレーヤ正大師の著書・第二弾『覚醒新世紀』いよいよ12月発売
**特集2** 末法の世を救う哀れみの救済者　マハーカーラに懺悔せよ！
■マイトレーヤ正大師説法――「「極限」こそが成就への道」
■正悟師説法――「未来世を見通した生き方を／懺悔の素晴らしさ」 ウッタマー正悟師

■VOL.27（2002年12月号）

**総力特集** 古代日本の秘儀を解く――隠されたシヴァ大神信仰
■マイトレーヤ正大師説法――「今こそ懺悔の修行で心を透明に」

■VOL.28（2003年1,2月合併号）

**特集1** マハーカーラ・イニシエーションの奇跡　新しい世界の始まりの鐘が、鳴る
**特集2** 大いなる懺悔――マハーカーラの哀れみにすべてを委ねて
**特集3** 年末年始・イベントレポート――2003年　アーレフ・真理元年を迎えて
**特集4** マイトレーヤ正大師の「的中した社会・経済予測」・第3弾
■マイトレーヤ正大師説法――「絶対的真理を背景に大いなる救済を」

## 編集後記

「なしたことは返ってくる」と頭ではわかっていても、実際、カルマ落とし（＝悪業の清算）の矛先が自分自身に向けられたときには、なかなかその現象を自己のカルマとして受け入れることは難しいものです。しかも、どう見ても理不尽としか思えないカルマ落とし――何も悪いことをしていないのに傷付けられるといった状況――については、なおさらでしょう。

しかし、ここで立ち止まってよく考えてみてください。「かつてわたしは、相手が理不尽と感じるようなカルマを積まなかったか」と。

例えば、蝿や蚊、ゴキブリなどの弱小動物を、「その存在が気に食わない」というだけで、痛めつけたり殺したりしたことはなかったでしょうか？あるいはムシャクシャしているときに、何の関係もない人に当たり散らしたことはなかったでしょうか？あるいは、単なる思い違いによって人を傷付けたことはなかったでしょうか？

それらの生き物や人たちからすれば、あなたによって与えられた苦しみは理不尽極まりないものだったはずです。そうしたカルマの積み重ねは、“まさに正当に”理不尽な現象による苦しみとして返ってくるわけです。

「カルマの法則に例外なし」――この宇宙の真理（鉄則）を再度認識し、疑念を払拭して、カルマの浄化の道に邁進していただきたいものです。

進化　VOL.34

2003年10月　初版第1刷 発行
宗教団体アーレフ

© Editorial staff of A, 2003 printed in japan

本誌掲載記事・写真などを無断で
インターネットその他に転載することを固く禁じます。

SHINKA
Published by
Religious Organization ALEPH
Vol.34
2003.10